IS　紅い閃光　仮面ライダー555

サム

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＩＳ　紅い閃光　仮面ライダー５５５

【Ｎコード】
Ｎ６８０８Ｖ

【作者名】
サム

【あらすじ】
乾巧こと仮面ライダー５５５がＩＳクロスオーバー

最終回自分の夢を語った後
気がついたらＩＳの世界に…
人と怪物との中で苦しむ人々。
仲間との約束や自分の夢のために巧は戦う。
人間としてオルフェノクとしてファイズとして…

プロローグ

3月3日深夜二時五十分、町の電気は消え、
しとしとと、小さく雨の音が聞こえるくらいで
ほぼ無音に近い状態の中、小さな水たまりにパシャと言う音とともに
暗闇の中息を切らしながら走る人影あった。
男は恐怖に顔を引きつらせながら後ろを振り向き言葉ではいいあら
わせない顔をし、また何かから逃げるように走る。

だが水に濡れた地面はまるで意志があるかのように男の足を滑らせる
男は地面に顔をぶつけ倒れ込む、その衝撃で靴か脱げ地面に転がる
それでも男の表情は変わらない、脱げた靴に目もくれず立ち上がろ
うとしたとき、目の前にいる異形の怪物を目にしたとき男は泣き崩
れ、発狂し、
助けを求める、その異形の怪物に言葉が通用するとは思えない。
それでも男は叫び続ける。
怪物はその光景をしばらく眺めた後、鋭い腕をゆっくりと振り上げる
男の叫びがよりいっそう大きくなる。

だが、高く振り上げた腕が振り下ろされることはなく、怪物の体が
一瞬宙に浮く
そして転げながら地面に倒れ込む、何が起こったと思い男は周りを
見回す
そこには、暗闇の中、全身に赤く光る線、大きく懐中電灯のような
顔の
異形が立っていた、赤い異形はゆっくりと、立ち上がった怪物に蹴
りを入れ素早く殴る…まさに圧倒的だった、同僚を殺し警察官まで
も殺した怪物が手も足も出ないのをみて不謹慎だと思いながら心が
躍った。

赤い異形が怪物の腹を蹴った瞬間、怪物（オルフェノク）の体から青い炎がわき上がり灰になった。
赤い異形はそれを見た後バイクに乗り深夜の町の闇に消えていった。
男はそれを見ながら一晩中そこに座り込んでいた。

暗闇の中赤い異形（５５５）は腹部のベルトから携帯を抜き取る
その瞬間５５５から人間（乾巧）の姿へ変わる。
巧は自分達が保護されているところへ向かった。

プロローグ（後書き）

感想お待ちしております。

1話

スマートブレイン社地下駐車場、
巧はそこにバイクをしまい本社ビルの中に入りエレベーターの最上階ボタンを押す
最上階に着きカーペットの上を歩くこと数十秒、巧は社長室と書かれている部屋の前に立ちノックもしずに中へ入る。

「やあ、おかえり。…どうだった?…ってここにもう一人がいないならそうゆうことだよね…」

「ああ、人を襲ってたからな、」

スーツをきちんと着こなした社長と言うにはまだ若い男は寂しそうに言うが
巧は簡単に返しソファーに座る

…巧はこの男はやっぱりあの男と、うりふたつだ思いながら冷たいお茶を口に運ぶ
このスマートブレイン社だってそうだ全て自分の知っていたものと違う
自分も気がついたら高校生くらいのときの姿になっていたし
この会社は人間を愛するオルフェノクの保護を行っているし、
自分の知らないＩＳなんてものもあるし
…自分がいた世界じゃない感覚に陥る。

「どうしたんだい、乾君?何かあるなら僕に言ってくれ。」

「いや、大丈夫だ」

「そう、ならいいんだけど……お茶のおかわりはいいかい？」

「いやもういい。」

いや、やっぱり自分の知っている世界じゃないこの男、木場勇治は死んだはずだ、それにライダーギアの存在もこの男は知らなかった。とするとこの世界はやっぱり違う世界か？
考えても答えがわからないなら仕方ない、そう言い聞かせ思考を打ち切る。

しばらくの沈黙のあと木場の電話が鳴る
鳴った瞬間お茶を飲み干し脱いだ上着を羽織る

「木場、場所はどこだ？」

「私立藍越学園受験会場の近くらしい」

互いに簡単にすまし巧はエレベータに乗る
そして地下一階へのボタンを押し、

腰に銀色のベルトを巻き、懐から携帯を取りだし、５５５と入力するそして携帯を持ったまま腕を高く振り上げ、
「変身」
と言いベルトに携帯を差し込む。赤い閃光が走り巧の体が光る
地下につきエレベーターのドアが開いた瞬間そこにいたのは赤い異形、ファイズだった。
ファイズはバイク（オートバジン）にまたがり受験会場へ急ぐ

受験会場ではもう試験が開始されているらしく外には警備員が立っていたがすぐに灰になり崩れる
そしてコツコツと小さく足音をたてて魚の様な怪物、スティングフィッシュオルフェノクが三叉の槍を構えゆっくり試験場の中に入ろうとしたとき
鼓膜をつんざく様な音とともにバイクがスティングフィッシュオルフェノクにぶつかるとそのまま壁に叩きつける。
よろよろと立ち上がるスティングフィッシュオルフェノクの腹に強烈なパンチがめり込むとスティングフィッシュオルフェノクはガラスを突き破り隣の部屋へ吹き飛ぶ
その部屋は一機のＩＳがあるだけで何もない部屋だった。
逃げようとするスティングフィッシュオルフェノクのまえにファイズが立ちふさがり攻撃を加える、
ファイズが蹴りを入れスティングフィッシュオルフェノクがＩＳのほうへ吹き飛ぶ
だが、スティングフィッシュオルフェノクがＩＳと触れたとたんＩＳが光り起動する

さっきまでの立場が逆になりＩＳを装着したスティングフィッシュオルフェノクがファイズの首をつかみ地面に叩きつけ踏みつける。
「おいおい、どうしたんだ？あ、なんか見せてみろよ！ええ！？」
「ちっ、ギャーギャーうるせえよっ！」
ＩＳを装着したスティングフィッシュオルフェノクはファイズの首

をつかみ持ち上げさっきまで滅多打ちにされていたと思えない様に言い放つがファイズが腹を蹴り腕の力が緩くなりなんとか脱出した。

「ゲホッ、あーくそっ　…なら見せてやるよ。」

そう言ってファイズはミッションメモリーを抜きファイズショットに取り付けＥＮＴＥＲキーを押す

そして左腕からアクセルメモリーをベルトに差し込むと胸の装甲が肩に移動し色が変わる、

「あーん、ンだよそれ……うぉぁぁ！」

一瞬、一瞬の間にスティングフィッシュオルフェノクの腹部にΦのマークが大量に刻まれ青い炎を出した後ＩＳを残して灰になる。

そしてファイズの装甲が閉じ元に戻る。騒がしくなり見つかる前にファイズの姿のままバイクに乗り一つの不安を残しつつも走り去った。

変身を解除して、巧はオルフェノクもＩＳに乗れるのか？という疑問と不安が頭をよぎった。

1話（後書き）

感想、質問お待ちしております。

2話

巧は社長室のソファーに腰を下ろしさっき起こったことを木場に話す。
本来ＩＳは女性にしか動かせないはず、なのにあのスティングフィッシュオルフェノクが動かし操れた。

そこが問題だ、もしスティングフィッシュオルフェノクが何か特別で男でＩＳが使えて、しかもオルフェノクだった、なんてオチだとしたらどれだけ心が軽くなるか、

「その話を聞く限りオルフェノクもＩＳを使えるってのがしっくりくる…」

「ああ、そんなこと過激派が知ったら黙ってるわけがねぇ」

過激派、木場が立ち上げたこのスマートブレインは穏健派のオルフェノクが集められ人を傷つけないが
過激派は力を得た快楽に溺れ人を傷つける真逆の存在、巧もちょくちょく過激派と戦っている。

「それを知ってヤツらはＩＳ学園を狙うと思う、量産型のＩＳもあるし専用機持ちも居る、それにまだ子供だ。」

「だがどうやってＩＳ学園の生徒を守るんだ？」

「…乾君、ＩＳは女性にしか使えない、でもある男子がが動かせたら世論はその男子をＩＳ学園に入れたがるだろう。」

「それが俺って訳か…」

「もちろん乾君がいやだというのなら他の…「いやそれでいい。」
…そう、なら頼むよ。」

四月七日

ＩＳ学園入学式、周りが全員女子の中一人だけ男子が窓際に座っていた周りの視線が集中する中
誰かに目を合わせることもなく静かに外を見ていた、何となく気まずいから誰かと話さない訳では無く
ただ何となく外を見ていた、
教師が少しざわざわとする教室に意気揚々と入り自己紹介と学校の説明をするが、反応がない。
半泣きになりつつも言うべきことをすませ、生徒に自己紹介をさせる一番は…俺だった。
周りのより視線が自分に集中するのを感じる、少しだけプレッシャーを感じつつも一言

「乾巧だ」
そういい席に座る、数秒の間の後教室中からブーイングがとぶ。
巧自体も人付き合いはうまくはないと思っているが自己紹介はこのくらいでいいだろうと思い教師（山田真耶）に次の人に変わるよう軽く言う

巧は他の人の自己紹介を聞きながら、ボーッと外を見ていた。

2話（後書き）

お気に入り登録してくれている人は
これを読んでくれているって解釈でいいのかなぁ。

ご感想、質問等お待ちしております。

3話

…居心地が悪い…

それが巧の心情だった、授業中から昼食の時、ずっと視線を感じていた。
だが誰も話しかけてこない、それがよけいに巧の気分を害した
そしてボソボソと聞こえる声おそらく聞かれてないと思っているのだろうがオルフェノクである巧には
全て聞こえていた。自分に対する暴言などでないが、
時折チラッと見られ指をさされこっちを見ながらボソボソと何かを言う。

「うざってぇ…」

廊下を歩きながらポツリと呟いた。

角を曲がったとき視界の端に山田先生がうつりそして巧に近づいてくる。

「えっとですね、乾君の寮での部屋が決まりました」

そういって部屋の番号のついた鍵を受け取る。

「荷物はさっき宅配で届きましたので部屋に置いておきました。」

「ほかには、「悪い、俺のバイクはとどいたか?」…ええ、ＩＳの格納庫に入って左側にあります。」

「そうか、悪ぃな。」

その後山田先生と一言二言話した後、部屋にいこうとしたとき自分の部屋のまわりから人の声が聞こえたが少し疲れてたのでそれを気にしずに中へはいるとシャワーの音が聞こえるあたりを見まわすと女子の制服がきれいにたたんであった部屋を間違えたのかと思い何度も確認する、

間違ってはなかった、間違いであってほしかった。

はぁ…と溜息の後、巧は静かに枕と毛布を持ちＩＳ格納庫へ向かった。

左側の地面に腰掛け、しばらくオートバジンを見た後、近くにあるシャワー室で全身を洗い、その後、巧は寝た。

これがＩＳ学園での一日だった。

「貴様には学園からのＩＳの支給に時間がかかる、がある企業が援助してくれたので明後日には届く」

もう一人の担任織斑先生がそう言った後、教室がざわめく

「すっごーい！専用機だって！」

「いいなー私も欲しいなー」

「しかも政府だけじゃなく企業のバックアップもだって～」

「「「いいな〜」」」

何人かの声がハモる。

ある企業、巧はその言葉を聞いたとき真っ先にあいつ（木場）の顔が思い浮かんだ。

と同時に敵意の様なものも感じた。

3話（後書き）

今回は短め

さて、原作道理にセシリアと戦わせるか、それとも、うーん迷う。

ご感想ご意見等お待ちしております。

4話

「…どちらが代表者としてふさわしいか、決闘ですわ！！」

金髪の女子、（セシリア・オルコット）が巧を指差しながら叫ぶ。
まわりがざわざわと騒ぎ、視線が集中する。
なぜこんなことになったのか、少し時間をさかのぼる。

「ああそういえば、再来週にあるクラス対抗戦の代表者を決めねばならんな」

机に突っ伏していた巧はその言葉を聞いてだいたい意味を理解してまた机に突っ伏した。
要するに委員長や学級委員のような面倒ごとだ、自分には合わないと思い、誰かを推薦することも無く
立候補することもなかった…が

「乾君がいいと思います。」

「はーい、私も乾君を推薦します。」

「…他に無いのなら乾で決定だが、」

「ちょっと待て…「お待ちください！納得がいきません！」

危うく俺で決定しそうになったとき、俺の言葉を遮り、ガタンと大きな音を鳴らし、金髪の女が大声で言った。

「クラス代表者に男などとんだ恥さらしですわ！第一イギリス代表候補生であるこのセシリア・オルコットでなく、しかもこんな授業中机に突っ伏しているか、外をボーッと見ている様なやる気のないこんな駄目な男、わたくしは認めません。それにまだ…」

「セシリア・オルコットさんを推薦します。」

セシリアの話を聞いていた巧が席を立ち、言葉を遮るようにいった突然の巧の言葉に皆、唖然とする

「…これでいいだろ。」

「あ、あなたなぜそんなことを！？」

セシリアはただ巧が気に入らなかった、専用機をもらったとき自分はいままでの努力が実を結んだと思い、いろんな人に自慢した、だがこの男…乾巧は違った自分の専用機に対しどうでもいいような態度だった。人の価値観は人それぞれ頭ではわかっても納得できない。どうしても自分と比べてしまった。

三年前、両親が他界した自分は努力した。そして専用機を手に入れた。まわりに自慢した自分

急に現れ、急に専用機を手に入れ、どうでもいいと思っている乾巧

気にくわなかった。ただそれだけ。
クラス代表なんてどうでもいい、ただ自分の方が優れているそれを自分に証明したかった。
だから乾巧を罵倒して焚きつけようとしたが、予想外の反応だった専用機持ちである自分を恐れてるんじゃない、関心がないそう考えるとよけいに苛立った。
一旦深呼吸をして落ち着いた後大きな声で言いはなった

「ですが、あなたを推す人もいますから…どちらが代表者としてふさわしいか、決闘ですわ！！」

「…というわけだ乾、オルコット明明後日の二時ＩＳを使った決闘とやらをやれ。それでは解散！」

巧はオルフェノクである、だから罵倒され傷つけられることも少なからずあったからたいして傷つくことはなく、特に何も感じなかったから、そんなにやりたいヤツがいるならそいつ（セシリア）に代わっただけだが俺を推してくれた人のことを考えてなかった。

「…やるしかないか」

そう呟き、巧は今日届く自分のＩＳを見に行った。

４話（後書き）

ＩＳを早く出したいけどいろいろと長くなったよ

ちきしょうめ

ご感想、ご質問等お待ちしております。

5話

巧は自分の寝床でもあるＩＳ格納庫につくと目の前にあるＩＳを見つめた、
黒と銀のボディに赤いライン、腹部には携帯がすっぽり収まるくらいの穴、そして背中にはとても小さくスマートブレインのロゴがあった。

「では、乾ＩＳにのってフォーマットとフィッティングをすましておけ。」

「あの～織斑先生、フォーマットしなくていいらしいですよ。」

近くにいた織斑先生が山田先生の言葉を聞き少し顔をしかめる。

「ああ、そのかわりダウンロードはするらしい」

そう言って巧はファイズフォンを腹部の穴に差し込む。
するとチュィィィとＩＳから電子音が聞こえる。

「乾、どうしてここまでのやり方を知ったんだ」

「…さっきやりかたの説明をメールで教えてもらったんだよ。」

これにな、といい背中のスマートブレインロゴを指差す。
あとはダウンロードが終わるまで2時間放置、ダウンロードが終わっても、
巧はＩＳに試合当日まで乗れないのでもうやることはなかった、織斑先生も山田先生も少し巧と話した後

格納庫から出て行った。

その後二人が完全に出て行った後、巧はウルフオルフェノクになり、周りに耳を澄ました。
２時間ファイズフォンをダウンロードに使っている間、ファイズフォンはＩＳに差しっぱなしだ、
つまり変身できないこの２時間、木場からの連絡も聞けない、
だからオルフェノクがでたら巧もファイズとしてでなくウルフオルフェノクとして戦わねばならない。
がＩＳ学園に耳を澄ませるだけでなく、自分がオルフェノクだということがバレないよう、周りにも気を遣う。

この２時間、巧は生きた心地がしなかったという。

巧は一度もＩＳに乗れぬまま試合に向かった。
アリーナが使えなかったり、使える日に限ってオルフェノクがでたり理由はだいたいそんなものだ。
…対戦相手は巧の理由などわかってもらえるはずもなく、
ただ自分を嘗めているとしか感じられないだろう。

上空で向かい合い試合開始の音が鳴るまで巧はストレッチをしていた。
セシリアはそんな姿を見てただならぬ苛立ちを感じた。

試合開始のブザーが鳴ると巧は素早くストレッチをやめ、構えをとる
セシリアは銃を構え撃つが光弾の先に巧はいなかった、センサーを確認し下を見る。

そこには地面から小型銃を構えるＩＳ、５５５がいた

セシリアが回避行動を取る前に５５５から光線が連射され、セシリアに数発命中する。
小型銃だったのでたいしたダメージは無かったがあたったという事実は、
セシリアの熱くなった頭を冷やす、回避行動をしながら肩についていたフィン状の物を操り５５５の周りを囲む。

「これであなたの快進撃も終わりですわ！」

…巧はＩＳの戦いは初めてである、それ以前に動かしたのも初めてしかも相手は何度もＩＳを動かし何人も打ち負かしてきただろう。
不利と言うより戦いにすらならない。

だが、ファイズとしてオルフェノクとして人間として、乾巧として戦ってきた巧にはＩＳというものは、
ハンデにしかならなかった。

5話（後書き）

長くなりましたがここで一旦切ります

ご感想、ご質問等お待ちしております。

6話（前書き）

ファイズ＝仮面ライダー

巧のＩＳ＝５５５

セシリアのＩＳ＝ブルーティアーズ

ビットの名称＝『ブルーティアーズ』

とってもややこしいよ！

6話

巧のＩＳ『５５５』は武装はファイズと同じだが決定的に違うものがある。
一つはフォトンブラッドがないこと、
二つめは……

巧の周りを４つのフィン状のものが囲む、そのビットの先の銃口が四方八方から巧を狙う
ファイズエッジを握りしめ、だらりと構える

「この自立兵器『ブルー・ティアーズ』はわたくしの意のままに動く忠実な番犬の様なものでして
一度目をつけたらもうお終いですわ！」

そう言ったあと、巧の前のビットからレーザーが放たれる巧はそれを避ける。
それこそセシリアの思惑、レーザー一発だけならＩＳの機動性なら避けられるが避けた先にレーザーを、
そうやって相手を疲弊されるか、当てまくるかどちらかだ
セシリアは勝利を確信したが、

５５５には裏技とも言えるものがあった。
レーザーを避け続ける巧、何十発も打ったがかすりもしない
しかも疲労の色は全くない。

５５５にはファイズフォンから情報をダウンロードしているわけではない、スマートブレイン社の衛星『イーグルサット』からの情報をダウンロードしている

つまり巧には三百六十度見える上、周りの状況を把握できる
よって背後からや死角からの攻撃は意味が無くなる

レーザーを避けた後巧はビットを斬りつける、そして避けて間合いを詰めて斬る。
あっという間に４機のビットは鉄くずへと変わる
そしてファイズエッジをセシリアへ向かって投げつける。
セシリアはそれを避けるが、間合いを詰め目の前にいる５５５はセシリアをグランインパクトで思いっきり殴り、地面に叩きつけた。

地面に倒れながらも５５５のいる上空を睨みつけ銃を撃つ
上空で巧は浮遊しながら、ただ自身の手のひらを見つめていたが光弾がくると慌てて避ける。
光弾は肩を掠めシールドエネルギーを減らした。
地上から何発も打つが巧はそれをすべて避けるが
急に巧の動きが止まり直撃し地面に落ち砂埃が舞う
砂埃の中にはＩＳを展開していない乾巧が倒れていた。

『試合終了、勝者セシリア・オルコット』

ブザーがアリーナに鳴り響きアナウンスが勝者の名を告げる。
ワァァァっと観客席が歓声を上げる。
ただ唖然としていたセシリアは巧がよろりと立ち上がり外へ向かい走り去って行くその姿を目で追うことしかできなかった。５５５のシールドエネルギーはほぼ満タンだったなのに一発の光弾で残量が０になるわけがない。まわりの観客は「乾君負けちゃったね～」「後で慰めてあげようか。」と言っているが
違う、乾巧はこのセシリア・オルコットとの決闘よりも何かを優先した。
ＩＳを解除し着替えた後自分との決闘よりも優先した何かを知るため

巧が向かった方向へセシリアは走っていった。

6話（後書き）

ここまで、続きは明日

ご感想、ご質問等お待ちしております。

7話

巧はセシリアをＩＳ越しに殴った、
思いっきり地面にセシリアは叩きつけられ横たわっていた
それを見た瞬間巧の全身の力が抜けてきた。
「人間を守る」という親友との約束を破った気がし、クラス代表なんかのため、人を殴った自分も
オルフェノクと変わらない、そう思い手のひらを見つめる。

地面から光弾が連発され、５５５の肩を掠める、もはやセシリアと戦う気力を失った巧は
ただ避けることしかできなかった。
避けている最中ＩＳ学園の海側の方に巨大水中銃をもった灰色の怪物、フライングフィッシュオルフェノクが見え、巧の動きが止まる、
その瞬間光弾が命中し地面に倒れる巧はＩＳ、５５５を解除し倒れた様に
見せ、勝者を告げるアナウンスが流れた瞬間起きあがり外へ向かい走る。

一旦格納庫に行きファイズギアを手も持つと、人が居ないのを確認しウルフオルフェノクになり時速三百キロのスピードでフライングフィッシュオルフェノクの元へと向かう。
フライングフィッシュオルフェノクの姿が確認できる距離までゆくと走りながらファイズフォンに５５５と入力し、ＥＮＴＥＲキーを押しファイズフォンを腹部のベルトに差し込み横に倒す、その瞬間目をつぶりたくなるほどの赤い光の後、そこにはファイズがフライングフィッシュオルフェノクに飛びかかる、
少しでも遠くにとフライングフィッシュオルフェノクに走りながらのタックルをくらわし、フライングフィッシュオルフェノクと共に

地面を転がる、ファイズは素早く起きあがりパンチをくらわせ、
相手の攻撃をよけ、腹部にパンチを数発叩き込むと勢いよく吹き飛びコンクリートの上に倒れ込む。
巧は手首をスナップさせた後、堤防のコンクリートに横たわるフライングフィッシュオルフェノクにとどめをさそうと近づいたとき、海の方から何かが”水の上を走ってきた”
その姿に巧は一瞬動きが止まった、

水の上から堤防に飛び移ると”水の上を走ってきた”、フリルドリザードオルフェノクはファイズに向かい飛びかかってきた、
かつてこのオルフェノクと戦ったことはあったがこんな特技は初めて見た巧は唖然としたが、
飛びかかってきたフリルドリザードオルフェノクの顎にアッパーをくらわす。
フライングフィッシュオルフェノクも起きあがりファイズに水中銃攻撃を仕掛けるがファイズはそれを避け、ファイズフォンの光線をくらわせフライングフィッシュオルフェノクはよろめく

2対1で不利のように見えるがフリルドリザードもフライングフィッシュオルフェノクも連携がとれて無く、巧には大した脅威にはならなかったが、突如現れたセシリアによって戦況は一気に変わった。

セシリアは乾巧が走っていった方向へ行き、そこで見たのは灰色の怪物が2体にその怪物と戦っている
黒と銀の体に大きな黄色い目、そして全身にある赤いライン、黄色い大きな目以外はさっき戦っていた
乾巧のＩＳ『５５５』にそっくりだった。
セシリアに気づいたのかフリルドリザードオルフェノクは２０ｃｍ

の鉄板をも刺し貫く刀で猛然と襲い掛かる。巧はそれに気づきフラ
イングフィッシュオルフェノクを蹴り飛ばし走る。
セシリアの頭上を巨大な刀が振り下ろされる全く現実味のない突然
のことにただ見ていることしかできなかったセシリアに刀が振り下
ろされる…ことは無かった目の前に立つ黒と赤のラインの体の男が
身を挺して刀を受けた
当然ダメージは無いはずもなく目の前の怪物を蹴り飛ばした後、黒
と赤のラインの体の男は膝を折り倒れる。
パニックになりかけているセシリアを大きな黄色い目が見つめると
黒と赤のラインの体の男は

「逃げろ…」

と一言言うとまた立ち上がる、セシリアはその声に聞き覚えがあっ
た、無口でがさつで何処か冷めているあの乾巧を思い出した。

巧はポインターを足にセットし跳び足先をフリルドリザードオルフ
ェノクに向ける
すると赤い円錐状のターゲットマーカーがフリルドリザードオルフ
ェノクの動きを止め、
その円錐の中にキックをしながらファイズが入り、フリルドリザー
ドオルフェノクの背後に現れる、
フリルドリザードオルフェノクはΦの文字が空中に浮かび青い炎を
あげ灰になる。

そして素早くミッションメモリーをファイズショットに差し込み、
フライングフィッシュオルフェノクの水中銃から出るモリをたたき
落としながらフライングフィッシュオルフェノクに近づきの腹部を
殴る、同じようにΦの文字が空中に浮かび青い炎をあげ灰になる。

ふぅ、と息を吐いた後、後ろからセシリアから声をかけられる。

「…乾さん…ですわよね…？　あの、その…あの怪物はいったい…？」

「……」

巧は答えなかった、もし答えてしまったらセシリアもオルフェノクと関わってしまうかもしれない、そんな不安が頭をよぎる、だから何も答えず。わざと格納庫とは逆の方向に走りセシリアの目の前から去っていった。

セシリアは走り去っていく黒と赤いラインの体の男、乾巧の背中を静かに見つめていた。

7話（後書き）

フリルドリザードオルフェノク
格闘態　身長：２ｍ１３ｃｍ　体重：１２８ｋｇ

エリマキトカゲの特質を備えたオルフェノク。
水上を１００ｍ６秒で走り、大砲の弾丸さえ防ぐ盾と２０ｃｍの鉄板をも刺し貫く刀で猛然と襲い掛かる。
また口腔より発する声は超音波として物体を粉砕する能力を有している。

フライングフィッシュオルフェノク格闘態　身長：２ｍ７ｃｍ　体重：１２３ｋｇ

トビウオの特質を備えたオルフェノク。
自転車の男が変化する。
時速８０ノットという驚異的な泳力を持ち、巨大水中銃でモリを発射、　２００ｍからなら百発百中の腕を誇る。
また陸の戦いも水中と同様に、素早い身のこなしと手のヒレで空中を飛び石で切るかのように移動する事が可能である。

今回でできたオルフェノク。

ご感想ご質問等お待ちしております。

8話

巧は変身を解除し自分の部屋であるＩＳ格納庫へ戻った。
セシリアを庇ったときのダメージは思いのほか大きく、肩がズキズキと痛い
肩を見てみると内出血しひどく腫れていた、冷やそうと思い食堂から氷をもらいに行こうと立ち上がり
ドアを開ける、目の前にはセシリアが氷を詰めたビニール袋を持ちながら立っていた。

「あ、あの乾さん、肩にこれを…」

「……ありがとな…」

まだパニックが収まってないのか巧の顔を見た氷を渡した後も、何かを聞きたい様なセシリアを見て巧は中に入るようセシリアに促す。
肩を冷やしながら巧は一言言った。

「…で…なにが聞きたいんだ」

「ええ、では……あなたは怪物から皆さんを守るためわたくしとの決闘を放棄したのですか。」

さっきまでおどおどしていた人物とはまるで別人のようにハキハキと巧に尋ねる。
巧もこの質問は予想外だったらしく少しの間のあと答える。

「…ああそうだ、なんか文句あっか。」
少し喧嘩腰になったこと後悔しながらセシリアの返事を待つ
「いえ、それを聞いて安心しましたわ。」
ニコリと笑いセシリア言う
「だって試合で負けたという汚名を背負いながら、誰にも褒められることもなく皆さんを守るために戦った人……素敵だと思いますもの。」

「そんなたいそうなもんじゃねぇよ」
「いえ、ご謙遜なさらずに……でもその性格はなおした方がいいですわよ。」
冗談じみた様に言うと巧も少し笑みを浮かべながら、「ほっとけ、」言い返す。
その後オルフェノクやファイズについて説明をし、何かあったら連絡するようにファイズフォンの番号を教えた。

翌日
「では、乾ＩＳの武装の展開をしろ、そのくらいは自在にできるだろう。」
織斑先生が言うと巧は素早く『フォンブラスター』『フォトンエッジ』『ファイズポインター』
『ファイズショット』と無駄な動きもなく順に展開していく、

周りの生徒はその無駄の無い動きに驚く
それをを見ていた織斑先生は感心しつつ巧に言う
「動きに無駄はない、が後０．５秒早くしろ。」
巧はその言葉に返事をしＩＳの武装の展開を解除する。
「…では次オルコット、武装を展開しろ。」
「はい」
セシリアは返事をした後、狙撃銃『スターライトｍｋ?』を展開する。
「いい展開だ、感動的だな、だが無意味だ。…銃身を横に向けて展開して誰を撃つつもりだ、直せ。」
「ですがこれはわたくしのイメージで…「直せ。」…はい」
そう織斑先生が言うと、セシリアはもう何も言わなかった、と言うより言えなくなって授業は終了した

「「「セシリアさんクラス代表おめでとう〜」」」
クラス全員がクラッカーを鳴らし紙テープが周りに散らかる、巧はひらひらと舞い、地面に落ちた紙テープを見て誰が掃除するんだろう。と思いながら自分用のアイスコーヒーを口へと運ぶ。

しばらくたって巧はアイスコーヒーを飲み干して、静かに立ち去った。

同時刻ＩＳ学園正面ゲート前、ツインテールの小柄な少女が学園の中に入っていった。

8話（後書き）

ご感想ご質問等お待ちしております。

解説

今回は本編に出てきた巧のＩＳ、５５５やその他諸々について説明をさせていただきます。

まず巧のＩＳ【５５５】

武装はノーマルファイズと同じく
小型銃の【フォンブラスター】
近接格闘用の【ファイズショット】
足にセットし相手のシールドエネルギーに大ダメージを与える【ファイズポインター】
ブレード型の【フォトンエッジ】

そしてＩＳ【５５５】にはライダーギア、【ファイズ】とは違い【フォトンブラット】はありません
そのかわり、ＩＳ【５５５】にはスマートブレイン社の衛星【イーグルサット】からの情報をダウンロードして三百六十度見える上、周りの状況を完全に把握でき、背後からや死角からの攻撃の意味意味をなくすことができます。

ＩＳのハイパーセンサー自体も三百六十度見えますが操縦者は完全に把握することはできません。
つまり周りを完全に把握できるほどのＡＩと人を超えた能力が【５５５】には必要とされます。
ＡＩ部分は【オートバジン】のＡＩをコピーし、人を超えた能力はオルフェノクの力が関連しています。
オルフェノク専用機と言ってもいいような物ですがもしも過激派のオルフェノクが【５５５】を強奪した場合は安全装置として【オー

トバジン】のＡＩが【５５５】を起動させません。
そのため、【５５５】は巧専用機となっています。
ちなみにＩＳに乗った状態でもオルフェノク態や【ファイズ】に変身することも可能で【アクセルフォーム】、【ブラスターフォーム】でも可能です【ファイズ】の状態でＩＳを展開すると【フォトンブラッド】が倍増しＩＳに乗ったオルフェノクにも対抗できるようになっています。

【乾巧】

オルフェノクの王を倒し、真理と啓太郎に自分の夢を語った後の記憶が無くなっていた。
なぜか高校生くらいの姿になってスマートブレイン社の前に倒れており手元には【ファイズギア】と壊れたオートバジンの残骸があった倒れているところを木場勇治に保護される。最初は死んだはずの木場の姿に驚きを隠せなかった巧だが
木場と話しているうちにかなりよく似た別人と言うことが判明する。
そしてＩＳのこと、過激派のオルフェノクのことについて木場から聞くとすぐに自身の正体を明かし、
【ファイズギア】について話をして木場に協力する
協力の過程で【オートバジン】をスマートブレイン社に直してもらう。
一年くらいＩＳの世界に身を置いているためＩＳの強さや便利さを理解しているものの、女尊男卑の社会に不満を感じている。
性格は他者に対しぶっきらぼうな態度を取り印象を悪くするが根はとても優しく正しい心を持っている
後、過去のとある事件がきっかけで猫舌。

【木場勇治】
人の心を持ったオルフェノクでスマートブレイン社の社長
原作と同様ホースオルフェノク、身寄りのない巧を保護した。
それ以外にも衛星【イーグルサット】を使いオルフェノクになってしまった人間を保護している。
過激派のオルフェノクとは敵対関係にあるがそれもあまり好ましく思っていない。
オルフェノクがＩＳに乗れるという事実を知ったあとは巧をＩＳ学園へ向かわせる。
巧のＩＳ【５５５】は巧がもしもＩＳに乗ったオルフェノクに対抗するため、変身して【５５５】を使うと
【フォトンブラッド】が倍増するように設計したのは彼である。

解説（後書き）

ご感想ご質問等お待ちしております。

9話

「ごちゃごちゃとうるせぇな。」

巧は机に突っ伏していたが起きあがりセシリアとツインテールの少女が言い争っているのを見て小声で呟いた後、
また寝ようとした時、一人の女子に声をかけられた。

「ねぇ、乾君悪いけどあの二人止めてくれない？」

「あ、なんで俺がそんなことしなくちゃいけねぇんだよ」

「そこを何とか、乾君お願い！」

「ふざけんな、自分で止めろ。」

頼んできた女子にそう言うと巧はまた机に突っ伏す。
しょんぼりとしている女子を見るとしばらくして巧は起きあがり、
言い争いをしている二人のなかに入ると一言

「ごちゃごちゃとうるせぇよ、やんなら外でやってこい、寝れねぇだろうが。」

静かに怒りがこもった声で巧は二人に言う。

すると左側からは熱くなったセシリアから右側からはツインテールの少女から反撃を食らう。

「乾さんは黙っていてください、これはイギリス代表候補生と中国

代表候補生の間の問題ですわ！」

「そうよ！どこの馬の骨か知らないけど邪魔しないで……」

だがツインテールの少女は巧の顔を見た瞬間言葉が止まる。
巧やセシリアやクラスの女子も突然言葉が止まったことに不思議に感じる。
そしてツインテールの少女はしばらくして巧を見ると、

「……放課後ちょっとした話があるから、アリーナまで来てくれない。」

一言そう言うと教室を出て行き、二組の方に歩いていった。

巧は見た目は高校生だが精神年齢は二十歳を超えている。
そんな人物が自分に向けられている敵意に気づかないはずはない。
アリーナを選んだのも、もし巧が何かしたらＩＳで叩き潰すためだと思う。
危険極まりないことだが巧は放課後単身アリーナへと向う。

アリーナにはＩＳを展開したツインテールの少女が仁王立ちをして立っていた
そして静かに口を開く

「いまからアンタにいくつか質問をするけど、もしちゃんと答えなかったら……」

そう言ってＩＳの武装の青竜刀を展開し巧に見せる。

「……この写真の男子がどこにいるか知ってる？」

そう言って写真を巧に見せる。
その写真には少し髪の毛に青色がかった黒色で整った顔立ちをした少年がいた。

巧はその少年がどこに行ったのかは知らないが、
その少年の名前は知っている、
自分達と同じ存在（オルフェノク）

……織斑一夏のことを…

9話（後書き）

書いている途中、一回消えた、おのれディケイドォォォ

ご感想、ご質問等は励みになるのでお願いします。

１０話

ＩＳ学園に入学する数ヶ月前

巧はＩＳと言う存在を知り、自分達と敵対していたスマートブレインがここでは真逆の存在と知り、
自分が知っている世界と違うところが多すぎて混乱していた。
死んだはずの木場にそっくりな男…というより生き写し…いや性格も木場勇治本人がいるのに巧やライダーギアの存在を知らなかったし、どれだけ探しても西洋洗濯舗　菊池もなかった。
西洋洗濯舗　菊池の住所まで行ってみたら【レストラン　ＡＧＩＴＯ】という店になっていた。
店の人に聞いてみたらここは空き地で店を建てる前は何もなかった。
と言っていた。

オートバジンは修理に出しているので予備のバイク【ＨＯＮＤＡ　ＸＲ２５０】を押しながら巧はふらふらと
知っている道のはずなのに知っているものがない道を歩いていた、

（…真理、啓太郎、海堂、木場、草加、……）巧の頭の中で様々な人物の顔がフラッシュバックしていく、自分達を苦しめたスマートブレインからの刺客やスマートブレインと真っ向から対立した木場達、
自分を追い出そうとし、共に戦い志半ばで倒れた草加、そして自分を支えてくれた真理と啓太郎、

ここにはそれが全て無かった。
唯一あるのは巧の思い出の中だけ

巧は弱っていた、自分が守ろうとした場所も仲間も自分の目で見る限り無くなっていた…というより最初から存在していなかったことになっている、そんなことに簡単に耐えれるはずがなかった。
この世界に自分の居場所など無い、すべてにそう言われいる気がした。

この世界にもオルフェノクが出る、木場からの連絡を受け、ファイズに変身して戦うが、
自分自身や仲間が存在していなかったという理由が大きいのかいつの間にか、
巧は戦う理由を忘れかけてしまった。

そんなとき出会ったのが…織斑一夏…という少年の誘拐事件だった。

バイクを押しながら歩いていた巧の前に赤髪の少年が倒れていた巧は急いで赤髪の少年のもとに近寄り
声をかけるすると赤髪の少年はよろりと上半身を起こし周りを見回した後、巧に恐らく人の名前を連呼して何かを言っていたがパニックを起こしているらしく支離滅裂だった。
巧は赤髪の少年を落ち着かせるとだいぶ落ち着いた様子で巧に話しかけてきた。

「お、俺の友達の一夏が黒い服を着た変なヤツらに誘拐されたんだよ…」

そう聞くと巧は携帯を取りだし警察に電話をかけようとするが
赤髪の少年が続けて言った言葉に巧の手が止まる

「…なんか、オルなんとかの仲間を増やすために、とかなんとか言ってて怪しい宗教かよ…」

「…どっちに行った。「え…何？」どこに行った！！」

急に怒鳴り、血相を変え、赤髪の少年に聞く。
赤髪の少年は戸惑いつつも、

「黒いワゴンに乗ってあっちの方向にいったけど…」

といい方角を指差す。巧はヘルメットをかぶり赤髪の少年が指差した方向へバイクを走らせる。

街外れにある廃工場の中に男子7～8人の学生が手を縛られ一カ所に集められていた。
その学生の周りに黒いスーツ姿の男達二人組がいた、片方はじっと動かず、もう一人は落ち着きが無く学生達の周りをうろうろしていた。するとドアが勢いよく開き、帽子をかぶった鼠色のスーツ姿の男が入ってくると黒スーツの男達は視線を鼠色のスーツの男に向ける。
鼠色のスーツの男は7～8人の学生を見た瞬間口元を歪ませ言う

「…君たちは幸運だ、実に良い！君たちなら良いオルフェノクにな

るだろう。」

学生達の一人の織斑一夏やその他の学生も訳がわからず、目の前の男の話を聞く。

「…っと、失礼君たちはオルフェノクについて何も知らないんだったね、いやいや肝心なことを話さずに話を進めてしまうのが私の悪い癖だ。」

と言い鼠色のスーツの男は少し笑いながら続きを話す。

「オルフェノクというのは……こういったもののようなことを言うんだよ。」

そう言い終わるとそこには体に凶器ともいうべき鋭い刃が要所に生えている灰色の化け物が立っていた

学生達は驚きを隠せず、震えている者や泣きじゃくっている者、ニヤついている者等、反応は様々だった。

鋭い刃が要所に生えている灰色の怪物の陰が人の姿になり、

学生に話しかける

「私は、君たちを望む望まずにかかわらずオルフェノクにしてあげよう。」

ソードフィッシュオルフェノクの陰が口元を歪めながら剣を握り学生達に近づく。

巧が到着するまで…あと４分。

１０話（後書き）

天が呼ぶ！地が呼ぶ！人が呼ぶ！

長く書けと俺を呼ぶ！！

ご感想、ご質問等お待ちしております。

11話

ソードフィッシュオルフェノクが近づいたとき一人の学生が声をあげる。

「あ、あんた俺もそのオルなんとかになれるのか？　だっ、だったら俺をオルなんとかにしてくれ！」

歩を止めソードフィッシュオルフェノクは学生のほうを見つめる。学生は異常なほど興奮して不気味だったがソードフィッシュオルフェノクの陰の男は驚いた表情をした後笑い出した。

「…クックックッハッハッハッ！…いや失礼、私も自分からそう言い出す者は初めてでね、すまない」

「いいから、俺をあんた達のようにしてくれよ！　ほら！！」

「ああ、わかった。…ただ保証はないがな。」

「え、なんだって……」

学生が聞き終わる前にソードフィッシュオルフェノクの刀が学生の胸を貫いていた。
刀を抜くと学生は力なく地面に仰向けに倒れる、ソードフィッシュオルフェノクはまじまじとその姿を見ていた、すると学生はゆっくりと上半身を起こし、立ち上がる。
そして学生が手を握ったり開いたりした後、ミミズのような怪物（ワームオルフェノク）へ姿を変えた。

「ヒャッハッハッ！！最高だぜぇ！あんがとょぅオッサン！」
そう言いながら三日月状の刃を生成して軽く振る。
「…さて、君達も恐れることは無い、痛みは一瞬もだからね…」
そう言って刀を構えて一人の学生の胸を貫ぬく。
さっきと同じように立ち上がるとその学生の体が灰になってあっという間に崩れ落ちる。
「おや、彼はオルフェノクにはなれなかったようだね。まぁ仕方ないか。」
「ハッハッハッ！　オルフェノクは神に選らばれたヤツにしかならねぇんだよ。なぁオッサン！」
「……いや君は運がよかっただけなんだがねぇ…まぁそれで良いんじゃないかな、君の中では…」
「まあいいやオッサン残りは俺にやらせてくれよぉ、退屈なんだ…」
ワームオルフェノクは次々と学生達の心臓を貫いていく。
そして次々と学生達が泣き叫び、灰になっていく
ソードフィッシュオルフェノクは鼠色のスーツの男に姿と変えると携帯を持ちながら外へ出て行く。
学生が残り2人になったとき、
ワームオルフェノクが織斑一夏に近づき心臓を貫こうとした瞬間、
黒スーツの男達オルフェノクに変化してワームオルフェノクを止める、戻ってきた鼠色のスーツの男がそれを見てワームオルフェノク言う。

「待ちたまえ！何をするんだ、彼にはまだここにいてもらう必要がある。ここで死んでしまうと困る」

「チッ、仕方ねぇ…ならおまえからだ！」

そう言いワームオルフェノクがとなり学生の胸を貫く

その瞬間ドアが大きな音を立てて開く全員の視線が開いたドアに向けられる。

視線の先には高校生にくらいの男が立っていた。

男はヘルメットをつけていて表情はわからなかったが

拳を強く握りしめているところから怒っていると感じられた。

懐から携帯を取りだし何かを入力しながら口を開く。

「…戦うのに理由（居場所）が必要なら戦いの中で見つけやる！！」

そう言って携帯を持ちながら腕を真上に上げたあとベルトに差し込む

「変身！！」

いつもオルフェノクと戦うときに言っていた言葉、それは巧のの弱りきっていた心を奮い立たせた。

その瞬間赤い光の後、男の姿が変わり黒と銀の体に黄色く光る顔、

そして全身に流れる赤いラインの姿

…ファイズが立っていた。

１１話（後書き）

さぁ、振り切るぜ！！（訳：旅行に行ってきます）

ご感想、ご質問等お待ちしております。

12話

「うおぉぉぉぉぉぉ！」

叫びながらファイズはワームオルフェノクの胸部を殴るワームオルフェノクその衝撃で吹き飛び地面を転がる、そして一夏と学生を縛っていたロープをちぎると「逃げろ！」と一言言ってワームオルフェノク達に向かって走る。

黒スーツの男達も姿を変え、オクトパスオルフェノクとマンティスオルフェノクになりファイズを迎え撃つ、立ち上がったワームオルフェノクはファイズに暴言を吐きながら武器を構えて突進する。

ソードフィッシュオルフェノクも二刀流でファイズに襲いかかる。

一夏は立ち上がり逃げようとしたが隣の学生が動こうとしなかったのを見て学生の腕を掴み、立たせる。

「逃げるぞ！」と言い腕を引っ張りながら走るが、少し走ったところで重かった掴んでいた腕が軽くなる不思議に思い後ろを振り向くと学生がいたはずの場所には灰しかなかった、そして自分の手をゆっくり見ると手のひらには学生の腕ではなくただの灰が一夏の手を汚していた。

一夏は今日一日で起きた出来事に頭がついていけなくなりその場に倒れ込む。

ファイズも四対一の戦いにどんどん窮地に追い込まれていく

ワームオルフェノクがファイズを殴り飛ばし、ファイズは乗ってきた予備のバイクに激突する。

その衝撃でバイクの後ろに積んでいた【ファイズブラスター】がファイズの目の前に転がる。

ファイズはそれを手に取ると【ファイズフォン】をセットし再び変

身コードである【５５５】を入力する
その瞬間ファイズの全身が赤く変わり最強形態である【ブラスターフォーム】へと姿が変わる。

手首をスナップさせた後、拳を握りしめ、向かってきたワームオルフェノクを殴る、ワームオルフェノクはよろよろとふらつき地面に倒れる。すぐにファイズは【ファイズブラスター】を銃のようにしてＥＮＴＥＲキーを押しマンティスオルフェノクに銃口を向けショットガンのポンプアクションの様にガシャリと音を鳴らして動かした後マンティスオルフェノクに巨大な光弾を撃ち込む、その近くにいたソードフィッシュオルフェノクは衝撃で壁を突き破り外へ姿を消す、

あっという間にマンティスオルフェノクを倒したのを見た
オクトパスオルフェノクは叫びながらファイズに挑む。

「あぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

そのとき、もう一つの叫び声が後ろから聞こえファイズは振り返ると三日月状のブレードがブーメランの様に回転しながらファイズの首めがけて飛んでくる、がファイズはさっとそれを避けるとブレードは上に上がっていき天井を破壊する、屋根に使われていたコンクリートや鉄板が破片となって降り注ぐ。
ファイズやオルフェノクはこの程度当たってもよろめくだけで死にはしない
が、人間は破片に当たったら死んでしまう……この空間で唯一人間なのは…織斑一夏だけであった。
一夏の頭にコンクリートの破片が当たる。

ファイズはそれを止めようとしたがオクトパスオルフェノクに邪魔

され
一夏の頭上に降り注いだ破片を止めることができなかった、オクトパスオルフェノクの腹を思いっきり蹴飛ばすがオクトパスオルフェノクは倒れそうになるが持ちこたえる。

ワームオルフェノクは激怒していた、誰にも負けることがない力を手に入れ自由に暴れられると思っていたのに現実は謎の赤い男に数発殴られただけで立ち上がるのも困難な状況になった。
苛立つ心、オクトパスオルフェノクは自分が止めている間に赤い男を倒せと言っているがマンティスオルフェノクが瞬殺されるのを見たワームオルフェノクは自分も殺されるのではないかという気持ちになり赤い男に攻撃できないし、したくもない。
そんなとき鼠色のスーツの男のせいで殺し損ねた学生…織斑一夏がいた、頭にコンクリートの破片が当たったのに立ち上がったのは不思議だがそんなことはどうでもいい、この場に鼠色のスーツの男はいない

（俺を止める奴はいないし、殺しても良いんじゃないか、いやむしろ殺した方が楽しい）

そんな考えが頭の中を埋めていきワームオルフェノクが一夏に向かって走っていく、
ワームオルフェノクの学生は自分より弱い者を傷つけたりするのを快楽と感じるが自分より強い者や優れた者がいると不快に感じどんな手段を使っても自分より弱くするそんな性格だがワームオルフェノクが間違えたのは一夏を自分より弱いと思ったことだった。

ワームオルフェノクの腹を剣が貫く、

「え…あ、あれ…なん…で…？」

ワームオルフェノクの体から青い炎と共に言葉がこぼれる。
目の前にいたのは自分よりひ弱な学生ではなく、オリジナルと呼ばれる分類のオルフェノク、

そしてワームオルフェノクより上位個体のタイガーオルフェノクがいた。

１２話（後書き）

遅れてすいません。

ご感想ご質問ご指摘があれば感想に書いてください。
お待ちしております。

13話

ワームオルフェノクの体が灰に変わった後、タイガーオルフェノクの手が小刻みに震えて
持っていた剣がガシャンと音をたてて地面に落ちタイガーオルフェノクから織斑一夏の姿に戻る。

「な…なんだ今の…お、おれの体があいつらと同じ…俺は…あいつをこ、殺した…？」

一夏は自分の体に起こった出来事に動揺し、自分の犯したことに震えていた。
もしもあのときオルフェノクの姿になっていなければ一夏は死んでいただろう。
第三者（人間）が聞けば、正当防衛と言えることだがそれは人間の話、
互いに怪物（オルフェノク）だとしたら第三者（人間）は関わろうともしないし、一夏（オルフェノク）を
恐れるだろうし、もし自分がワームオルフェノクの様に人の心を失ってしまい人を襲ってしまったら…自分の大切な人をこの手で殺してしまうかもしれない、そんなことを考えるだけで恐ろしい。

…だが、それ以上に一夏が恐れているのは…

「おらぁぁ！！」

オクトパスオルフェノクの胸部にファイズ【ブラスターフォーム】の拳がめり込み
膝をがくりと落としオクトパスオルフェノクは青い炎とともに消え去り灰だけが残る。

巧は変身を解除し一夏に近づいたとき一夏はゆっくりと静かに巧に尋ねる。

「…あのさ…この姿になったら、あいつ（ワームオルフェノク）の様に人の心をなくしちまうのか…？」

「いや、違う、オルフェノクでも人であり続けたいと思っているならあいつ（ワームオルフェノク）の様にはならない。」

自分の姿をオルフェノクに変えて一夏は尋ねるが巧の言葉を聞いた後、

「そうか。」と言い、もとの姿に戻る、

「あんたも、その、オルフェノクってやつなのか？」

「……ああ、そうだ。」

そう言って巧もオルフェノクの姿になる。そのときに何かが高速で迫ってくる音が聞こえた。
ウルフオルフェノクの最高時速３００キロより早いであろうスピード、この世界に来て日はまだ浅い巧だが何が迫って来ているのかわ

かった。……ＩＳだ。
完結にＩＳがこちらに迫っているのを一夏に伝えファイズに変身し、
【ミッションメモリー】を抜き取り
【アクセルメモリー】と入れ替える。
一夏は目の前から去ろうとする巧に一つの疑問をぶつけた。

「……最後に一つ聞かせてくれ！その姿を知られて傷つけられたり裏切られたりしたのか？」

「…ああ、されたさ。」

「じ、じゃあなんで…」

「それでも俺は人を守りたいんだよ。……じゃあな」

そう言うと目の前からファイズの姿が消える。

…ここまでが巧の知っている過去の出来事…

それからしばらくその場に立っていた一夏の背後から壁を突き破る音がして後ろを振り向くとＩＳに乗った一夏の姉、織斑千冬がいた。一夏を見て安心したような表情をみせて一夏を抱きしめる。

「心配かけさせおって、この馬鹿者が…」

「ああ、千冬姉…ごめん……」

この誘拐事件の後、織斑千冬は情報を提供してくれたドイツへ感謝の印として教官としてドイツへ行く

…その数日後、織斑千冬の弟である織斑一夏が「旅に出る」という一本の電話と共に姿を消す。

１３話（後書き）

この距離ならバリアは張れないな！（挨拶）

ご感想ご質問等があったら感想に書いてもらうと励みになります。

１４話（前書き）

過去編終了、再び現代へ

１４話

「悪いが、こいつの名前だけは知ってるが名前だけだ、それ以外は知らねぇ。」

ツインテールの少女（鈴）の質問に巧は答える。

「そう…そうね…名前だけなら当時誘拐事件のニュースで流れたからね…」

そう言って一度言葉を止めて　ふぅ、と息を吐いた後鈴のＩＳの武器である青竜刀を巧の喉元に向ける。

「でも、私の友達の弾って奴がアンタがニュースに出てるとき私に電話をくれたの。」

「「一夏が誘拐されたとき、一夏を追いかけていった奴がテレビに出てる。」ってね」

「……何か一夏と関係があるんでしょう…言いなさい…ッ」

鈴は巧を睨みながら言う、その目は期待と不安そしてその二つを覆うほどの怒りが入り交じっていた。

一夏の居場所は誰も知らない、安否も確認できていない

そんな中で巧の存在は大きな手がかりとなるのだろう。

だが巧も一夏がオルフェノクであることなどを言えるはずもなかった、

「こいつと俺は関係ねぇ、誘拐事件のとき近くにいたのもただの偶然だ。」

強く否定する巧を見て鈴の肩と共に青竜刀が下に下がる。

「…そう…そうなの…悪いわねこんなことしちゃって…」

「ああ、……俺はもう帰る……悪いな力になれなくて…」

鈴からの返事は無く巧はゆっくりと自分の部屋、格納庫へ向かった。

5月　クラス対抗戦当日

あれから数週間たった、巧は一人ＩＳ格納庫にある小さな画面（モニター）で鈴とセシリアの戦いを見ていた。

以前クラス対抗戦のためセシリアに近接を得意とする相手が敵だったら

狙撃やビットでどう戦うべきか訓練相手になってくれとセシリアに頼まれ数回はセシリアと模擬戦をして鈴対策はとった、が相手も訓練はしたのだろう

鈴がセシリアの懐に入り攻撃をするがセシリアは緊急回避をするが少しかすりシールドエネルギーを削る

その後セシリアがビームを撃ち込み、鈴はそれを回避するが後ろからビットの攻撃がかすりシールドエネルギーを削る。

だいたいこんな感じで進んでいくなか轟音と共にアリーナのシールドエネルギーが破られ何かが
砂埃をまきあげてアリーナの真ん中にたたずむ、砂埃でよくは見えないが
何なのかはわかる…ＩＳだ…
観客席のシャッターが閉まり避難指示が生徒に伝えられる。
謎のＩＳが動き出しセシリアと鈴に向けてビームが飛んでくる、二人のハイパーセンサーが同時に回避をしろと警告する、二人は急いでビームを避ける。

「凰さん！オルコットさん！退避してください。すぐ先生がＩＳで制圧しにいきます。」

山田先生の声が聞こえ退避しようとしたが二人は周りを見て一つの疑問が頭をよぎった。
それは今自分達が逃げたら先生が来るまで謎のＩＳは何もしないのか？
…そんなわけがない、
もしかしたらアリーナを破壊するシールドエネルギーを客席に撃ち込むかもしれない。
……なら私たちのやることは…鈴とセシリアは互いに顔を見合わせた後武器を構える
そこには最初に会ったとき互いに言い争っていた姿は微塵も感じられなかった。

「先生、私たちがこいつを足止めします。」

「ええ、でも早めに来てくださいね。」

「！、ちょっと二人とも聞こえますか！退避してください！」

「無駄だ、山田先生…あの馬鹿ども通信を切っている。」

ふぅ、と溜息をついた後、織斑先生は教師がいつ到着するか調べるがシールドバリアが再び張られているのを見て山田先生に理由を聞こうとしたとき山田先生が呟く。

「そ、そんな…」

「どうした！山田先生！」

「シールドバリアがハッキングされています！恐らく…先生方の到着は２０分ほどかかります…」

「…ッ…他に誰か近くにいないのか！」

「先生方では誰も…」

そのときアリーナの横の壁をぶち壊しＩＳが入ってきた。
そのＩＳに鈴、セシリア、謎のＩＳ、の視線が集中する。
ピットの中の二人はモニターを見つめるがモニターの画面が急に消える。
そのＩＳは乾巧のＩＳ【５５５】だが装着しているのは謎のＩＳと

同じように素顔が見えず、
顔には大きく光る黄色い目、黒と銀の体に赤いラインの男【仮面ライダーファイズ】が乗っていた。

１４話（後書き）

創世王に俺はなる！！（挨拶）

ご感想ご質問等お待ちしております。

１５話（前書き）

ＩＳに乗ったファイズ＝【ＩＳファイズ】

色々とややこしくてすいません。

１５話

巧は格納庫のモニターから鈴とセシリアの対決を見ていたが謎のＩＳが出現たのを見て巧の表情が変わる
観客席のシャッターが閉じていく音が聞こえる、モニターは謎のＩＳと鈴とセシリアしか映ってない。
だが鈴とセシリアは逃げるどころか武器を構え謎のＩＳを睨みつける。
その光景を見て二人が何をするのかわかった瞬間、巧はファイズに変身しＩＳを展開し
格納庫から飛び出した、そのままアリーナの入り口に向かう。

アリーナの入り口に近づくとＩＳの【ファイズショット】を手に握り、入り口を塞ぐ壁を思いっきり殴り破壊し中に入る。そのとき壁の破片がアリーナのカメラにまで吹き飛び壊れる山田先生はモニターが映らなくなり混乱しているだろう。そう思うと少し罪悪感を感じるが、そんな気持ちも目の前の謎のＩＳを見て頭の中から消える。
謎のＩＳはつま先まである長い腕に頭と肩が一体化したような形に、全身装甲（フルスキン）つまり肌を一ミリも見せていないＩＳとしては異形だった
だがそれは今の自分もおなじだと
と思い巧は少し笑うが相手がこちらに銃口を向けたことで気持ちを完全に切りかえる。

巧がこんなにも早く来れたのは他の先生はＩＳを乗るためＩＳ格納庫に行かなければならないがそこまでの道のりがハッキングされていて時間がかかっていたが巧はＩＳ格納庫に住んでいるのだ、だから他の誰よりも早くアリーナに入れた。そして誰も巧がＩＳ格納庫に住んでいるということは知らない。

「な、なにアレ…」
鈴は突然壁を破壊し現れたもう一つの謎のＩＳを見る。
目の前にＩＳから情報が送られてくるそこには【乾巧のＩＳ、５５５】とでているが全身装甲（フルスキン）であると言うことは表示されていない。
少しパニックになるが、今自分のやることは謎のＩＳから観客の皆を守ることであって【ＩＳ，５５５】を倒すことでは無い、そう瞬時に考え判断するのはさすがは代表候補生といったところか、セシリアも武器を構えているのを見て鈴は謎のＩＳに突撃する。

【ＩＳファイズ】は謎のＩＳの攻撃を避け懐に入り腹を蹴る、謎のＩＳが懐にいる【ＩＳファイズ】を叩き潰そうと巨大な拳を振り上げたあと勢いよく振り下ろすが巨大な拳は地面を砕く、
巨大な拳を避けた【ＩＳファイズ】は地面にめり込んだ拳を踏みつけると【フォトンエッジ】で勢いよく突き刺す。謎のＩＳがもう一本の腕で【ＩＳファイズ】を殴ろうとするが轟音と共に謎のＩＳの腕が爆ぜ、頭部にビームが束になって命中する。攻撃の方向を見ると互いの武器から硝煙を出しながら二体のＩＳが浮遊していた。

「ちょっと乾！アンタなにやってんのよ中に人が居るかもしんないのになにザックリ刺してんのよ！」

「そうですわ乾さん！」「アンタも頭にバンバン撃ったでしょうが！！」

ギャーギャー騒いでいる二人に巧は言う

「あいつは無人機だ。近づいたときハイパーセンサーで呼吸、心拍数とか聞いたけどこいつからは聞こえねぇ…だからメッタクソにしてもいいんだよ。」

その言葉を聞き少し唖然とした二人だったがすぐにニヤリと口元を歪ませ謎のＩＳ、無人機を見ると二人の声が重なる。

「「無人機なら遠慮はいらない「ですわね！」「ってことよね！」

最後の言葉は違うものそれ以外は打ち合わせでもしたんじゃないか？と言うくらい息がぴったりだった

巧はそれを見た後二人に言う。

「おい、一気に決めるぞ。」「ええ！」「もちろんですわ！」

二人の返事の後、巧は【ファイズポインター】を足につける。

その間セシリアは無人機を撃ち鈴の前に誘導する誘導した先に鈴が【龍砲】を無人機に叩き込み無人機は地面に叩きつけられる。立ち上がる前に赤い円錐状のモノが無人機の目の前に現れる。

そしてその中に【ＩＳファイズ】が叫び声と共に飛び込む。

その後無人機に赤いΦのマークが浮き上がり爆発する。

巧は変身を解除しただの【ＩＳ　５５５】に戻るとアリーナ入り口から武装した先生がやってくるが周りを見て唖然とする。

その後三人は命令を無視し勝手な行動に出たことと巧はいくら事情があったとはいえアリーナの壁を破壊したということでたっぷりと怒られた。

１５話（後書き）

無人機「最初に言っておくこの腕は飾りだ！」

ご感想ご質問等、心よりお待ちしております。

１６話

無人機騒動から数週間、六月になる。

時間が経つのは早いな、と思いながらカーテンを開け太陽の眩しさに目を細めながら窓を開け空気を入れ換える。無人機騒動の後、巧が格納庫に住んでいると言うことがバレて急いで巧の部屋が用意された

全生徒が女子のＩＳ学園では男子である巧が珍しいのかたまに部屋の前をうろうろする女子もいたが最初だけで今はもうそんなことは無くなったし、学園に来るオルフェノクも全然現れないから楽になった。

「本当に良い天気だな…」

思わず口に出してしまうがその言葉も綺麗に洗った真っ白の洗濯物の様な白い空に吸い込まれていく。

巧は学校の制服に着替え、ファイズフォンを懐にしまいベルトも授業の用意と共に鞄に放り込み自分の部屋を出て食堂に向かう。

適当に食べ終えた後教室に向かう。クラスの女子は巧がどんな人物か少しわかったらしく

「ぶっきらぼうな態度だけどいい人」というように見ている。

まだはじめの頃、みんな巧のことを乾君と呼んでいたがある日一人の女子が「たっくん」と呼んだら懐かしそうな嬉しそうな顔をして返事をした。それからはみんな巧を「たっくん」と呼んでいる。

「たっくん、おはよー」

「…よぉ」

何人かに適当に挨拶を返し自分の席につくとまたボーっと外を見る。クラスの女子はＩＳについて、私服についてやらいろいろ話しているが山田先生が来る前にはしっかり席に座るあたりはさすがＩＳ学園の生徒と言ったところか。

「今日は皆さんになんと転校生を紹介します！なんと二人もです！！」

「「「えええええええええ！」」」

山田先生が言うと周りの女子がざわつく、あまりの声の大きさに巧は耳がおかしくなるかと思ったほどだ、山田先生が手招きをして教室に転校生が入るそのとき巧の視線が釘付けになり周りの女子が静まる

そう、片方が【男子】だったからだ。

「こんにちは、シャルル・デュノアです。よろしくお願いします。」

「……ラウラ・ボーデヴィヒだ…」

女子は簡単な自己紹介の後さっきより大きな声で質問攻めにしたり、男子であることに興奮している女子もいたが巧の心境は穏やかではなかった、

男である自分がＩＳに乗れるのはオルフェノクだからだ、オルフェノクは性別問わずＩＳに乗れる。

つまりあの金髪の男子はオルフェノクということだ…だが自分がオ

ルフェノクだということに気づいていないかそれとも人の心を持っているかどちらかだ、
そんなことを考えていたら急に織斑先生に声をかけられる

「おい乾、おなじ男子なんだ面倒を見てやれ。」

そう言うとシャルル・デュノアが巧に話しかけてくる。

「えっと、君が乾君だよね？初めまして僕は…「いいから早めに着替えに行くぞ。」あ、うん。」

シャルル・デュノアと共に更衣室まで巧は走る。
特に話すこともなく更衣室につくと簡単にＩＳ学園の説明をしながら着替える、途中巧が着替えるときシャルルが少し変な反応を見せたが気にせず着替えてグラウンドまで行く。

多少のハプニングはあったが特に何かあるわけではなく授業が終わり巧はシャルルと更衣室まで帰ろうとするが山田先生に呼び止められる内容はこうだ。

「デュノア君の部屋が用意できなかったので男子同士乾君とおなじ部屋で過ごしてください。」

とのことだ、別に悪いことではない。シャルルがオルフェノクだとしたらおなじ部屋なら何かあっても対応できる。そう思い巧はそのことを了承する同じようにシャルルも了承する。

授業が終わり巧はシャルルと同じ部屋にいる。しばらく沈黙が続いたがシャルルがその沈黙を破り巧に話しかける。

「巧君のＩＳはスマートブレイン社製なんだよね。どんな感じなの？」

「…ってもなぁ俺自身ＩＳに詳しくないからなぁ…あと君付けしなくていい。」

「まぁどんな感じかは確かマニュアルかなんかあったから…ほれこれだ」

そう言って巧はマニュアルを渡す。シャルルは驚いたような戸惑ったような表情をしていたが巧はそんなこと気にせずベットの上に腰掛けていた。するとファイズフォンが鳴り木場がオルフェノクが来たということを巧に知らせる。急いで鞄からファイズギアを取り出しドアを蹴り飛ばしオルフェノクのいる位置へ走るその巧の後ろ姿をシャルルはただ唖然と見ていた。

変身してオルフェノクがいる場所へ到着するとオルフェノクが青い炎をあげファイズの目の前で灰になった。理由は目の前にいるものをみて一発でわかったが矛盾が生まれる。

あのベルトは壊れたはずだ、あのベルトをつけていた男は死んだはずだ、なぜここにいる。

ファイズの目の前にいたのは格好はファイズに似ているが赤いライ

ンではなく黄色ラインが二本そして×のような顔に紫色に光る目、
仮面ライダーカイザがそこにいた。

１６話（後書き）

ご感想やご質問、ご指摘は感想に書き込んでください。
お待ちしております！

17話

「なんで…カイザが……？」

巧は思わず口にででしまった、それもそうだカイザギアは王との戦いで破壊されてしまったんだから

だが目の前にあるのは正真正銘カイザだった、しばらく互いに見ていたがカイザはくるりと後ろを向きそのまま何処かへと去っていった。完全にいなくなったあと変身を解除し寮に戻ろうとしたときファイズフォンが鳴る、木場からだ今回はオルフェノクではなく違う話だった…

寮に戻るとシャルルが「いきなり飛び出してどうしたの？」と聞いてきたが

「なんでもねぇよ」と言い巧は寝ようとしたがふと気になったことをシャルルに質問する。

「…なあ、デュノア社って確かお前の…」

「うん、僕の父が社長をしてるんだ、フランスでは一番大きいＩＳの企業だと思うよ。巧もスマートブレイン社関わりがあるんだよね？」

「まぁ、腐れ縁というか…なんつうか…」

「そうなんだ……僕と同じだ…」

シャルルは最後に何かポツリと言ったようだが巧は聞き取れなかった。

「？、なんか言ったか」

「ッ…何でもないよ！そ、そろそろ寝ようか！」

シャルルの何とも言い難い気迫に押されて巧は「あ、ああ」といい寝る。

その日巧はは懐かしい夢を見た真理や啓太郎…草加と洗濯していた。懐かしいがたとえカイザが再び現れようとも、もうそのころに二度と戻れないだろう。

次の日の授業中巧はも木場が昨日言っていたことを思い出しいつも以上に集中できなかった。

木場は以前デュノア社とスマートブレイン社は一時期手を組みだいぶうまく商売がいっていたことがあり互いに売り上げも右肩上がりだっただのでそれなりに木場とデュノア社長は仲が良かった。そんなとき木場達が話し合ってるときの目の前に現れたのがシャルルによく似た女性だった、デュノア社長は隠すこともなくその女性を自分の愛人だと言って木場に紹介した。木場自身は愛人というもの自体あまり好ましく思っていなかったがその女性はだいぶ美人だったらしい。そのとき女性はお腹が大きくなかに子供を授かっていると一目でわかった。ここまではたいした問題では無いがそのあとだそのお腹の子は女の子でシャルロット・デュノアという名前だった。その後デュノア社は経営危機に陥りスマートブレイン社も契約を切

った。その後愛人の女性はどうなったかは木場は知らないが、シャルルはあまりにもその愛人の女性に似ている、お腹の中にいた子も成長していればこれくらいの年齢だろう。つまりシャルル・デュノアはオルフェノクではなく女性なのかもしれない。

木場の言っていたことを思い出し巧はちらりとシャルルに視線を向ける。

授業が終わり考え事をしているとシャルルに声をかけられる。

「あのさ、巧あとでちょっとＩＳで模擬戦やってみない？」

「…ああ、いいぜ。」

「じゃあ先アリーナにいってるね！」

そういいシャルルはアリーナの方へ走っていく、ただ二人ＩＳの操縦技術を高めるための模擬戦

だが巧は木場の言葉が頭にずっと残っていた。

「デュノア社は最近またスマートブレイン社と関係を持とうとしている。乾君きみのＩＳのデータも知ろうとしている。変な話だが気をつけてくれ。」

つまり模擬戦をすることで【５５５】のデータを知ろうとしている、マニュアルには【５５５】の基本装備くらいしか書いてなく見られても大して問題じゃないがフォトンブラットやオルフェノク関連を知られるとまずい。気をつけようと思いながらアリーナに向かう途中ファイズフォンを取り出し何かあったらすぐ気づくように着信音をＭＡＸにしアリーナに向かう。途中ファイズフォンを持っている

姿をある人物に見られていたのを巧は気づかなかった。

辺りも暗くなり模擬戦が終わりシャルルと更衣室に戻る途中、目の前にもう一人の転校生ラウラボーデヴィヒが巧に近づくとラウラは巧に話しかける。

「乾、電話番号を教えてくれないか？」

そう言いラウラはポケットから携帯電話を取り出す。だが巧はラウラの携帯をみて固まった。
その携帯が…【カイザフォン】だったから…

「……悪いな今携帯持ってないんだ。また３０分後くらいにアリーナの外のベンチで待ってる。そこで携帯を持って行くから…」

「…そうか…待ってるぞ。」

シャルルは立ち去っていくラウラを不思議そうに眺めながら巧に話しかける。

「…意外だね、あんまりみんなと話さないラウラが巧の…ちょっと巧！どこ行くの！？」

返事もしずに巧はＩＳスーツの上に急いで服を着て自分の部屋に戻りベルトを手に取り
アリーナの外のベンチに行く。

織斑千冬がドイツから居なくなって数週間ラウラの部隊は資金不足に陥ったことがあった。
そのときとある条件をもとに大量の資金援助をしたとある軍の大佐ががいた。
その条件とは「ＩＳ学園に入学し、ＩＳ学園に近づく薄汚いオルフェノクを始末しろ。」とのことだ、
ラウラは最初意味が分からなくその大佐に聞くと笑いながら「すまない」と謝りオルフェノクについて説明し、中にベルトと携帯がはいったアタッシュケースを渡し、続けてこう言った。

「いやいや、肝心なことを話さないのが私の悪い癖だ。」

いっとき調査のためドイツから日本にいった鼠色の服を愛用している男、大佐にベルトをもらいラウラは戦っていた、が前回の戦闘の時もう一つのベルトをつけた赤いラインの謎の人物に会った。
その後自室でラウラはＩＳで本国（ドイツ）に居る大佐に連絡をとる、すると大佐が口にしたのは

「そのベルトの持ち主は以前、織斑千冬の弟、織斑一夏を誘拐した犯人だ。」

と告げられた。ラウラの中の怒りが沸き上がる。
大佐は次に会ったら倒しベルトを奪えとだけ言い通信を切った。

ラウラはそんなことを思い出しながらカイザフォンを持ちながら巧

の到着を待った。

１７話（後書き）

オーズ面白かったですね。

ご感想ご質問お待ちしております。

18話

「待たせたな…」

「……」

アリーナの外のベンチでラウラはカイザフォンを持ちながら座っていた、巧もファイズフォンを持ち
ラウラの前に立つ、しばらくの沈黙の後巧はなぜラウラがカイザフォンを持っているのか聞こうとしたときそれまで下を向いてたラウラが顔を上げ巧を睨みながら立ち上がりゆっくりカイザフォンに変身コードを入力しながら言う。

「…貴様のベルトと命を貰うぞ…乾巧！　…変身…」

カイザフォンを腹部のベルトに差し込みファイズより低い音と共に変身の完了を知らせる。
【カイザブレイガン】を草加の様に構え巧に向かい突っ込んでくる。巧もすぐに変身コードを入力しファイズフォンを腹部のベルトに差し込み変身する。

突っ込んできたカイザの両腕を掴みファイズはそのまま、人の目がつきにくい海沿いの方へ移動する。

カイザはファイズが掴んでいた腕を振りほどきカイザブレイガンで胸部を斬りつけるとファイズは火花を散らし吹き飛び倒れる。倒れたファイズにカイザブレイガンのコッキングレバーを引きガンモードにし撃ちまくる。ファイズは急いで起きあがるが何発かが体を掠

める。
遮へい物に身を隠しファイズフォンを腹部から取り出しバーストモードにしカイザに撃つだがカイザは避けることなどしずにファイズに突っ込んでくる、ファイズはカイザに撃ち続けるがビームは全てカイザの目の前で止まる。そしてカイザショットを手に持ち遮へい物ごとファイズを殴る。
何とか避けて事なきことを得たがこのカイザは自分が知っているカイザとは違う。目の前でビームを止めるなんて能力はついてなかった、と、すれば……そんなことを考えていると顔の横をカイザブレイガンの剣先が掠める、

ファイズにはオートバジンにファイズエッジがついているため通常では剣などの武器はついていない、だからＩＳ【５５５】からファイズエッジだけ出してもＩＳ用だからファイズで持つには大きすぎる。
だがカイザが迫ってきたときＩＳ用ファイズエッジを出す、かつて木場がよくやっていたカウンターの要領でＩＳ用ファイズエッジがカイザの腹部に当たるとよろめきカイザブレイガンを落とすがすぐに拾い上げファイズに突っ込む、ファイズは思いっきりＩＳ用ファイズエッジを振り上げ地面に刺し、刺さったファイズエッジを踏み台にしカイザの頭上を飛び越えファイズショットを握りながら着地し殴ろうとしたとき腕が動かなかった。いくら動かそうと思っていても全く動かないするとカイザの肩に似合わない大きな筒、砲塔が現れ轟音と共にレールガンの弾がファイズの腹に当たり紙くずのように吹っ飛び何度も地面を転がり姿が見えなくなる。カイザはレールガンの展開を解除しファイズが倒れた場所に向かうがそこにはもうファイズの姿はなかった。
腹部のカイザフォンを抜き変身を解除したラウラは軽く舌打ちをし「逃がしたか」と呟きその場を後にした。

巧はレールガンを撃たれる瞬間ＩＳ【５５５】を展開したが一部しか間に合わずかなりのダメージを負った
その後なんとかアクセルフォームになりその場から脱出したがダメージが大きく寮に来るまでのちょっとした道のりで何度か胃の中のものが逆流し何度も吐いた。
自分の部屋につきドアを開けるシャルルはどうやらシャワーを浴びているようだがそんなことはどうでもいい、また何か逆流するのを感じトイレに入る
便器に吐いたものは吐瀉物でなく感じたのは鉄くさい味、血だった。
巧はそこで意識を失う。

シャワーから出たシャルルはトイレの方でドサッという音がし着替えた後トイレのドアを開けるそこには口元を血で汚し倒れている巧を見つけた。便器の外蓋は巧が倒れるときに閉まったので中の血は見られてない巧に何度か意識を確認するため体を揺さぶり声をかける、しばらくして巧が起きあがるとシャルルは言う

「大丈夫?、今先生を呼ぶから待ってて。」

「…いい、大丈夫だ…」

「大丈夫って……そんな風には見えないよ。」

「…先生は呼ぶなよ…」

巧が言うとシャルルは気迫に押されて黙る。

巧は着替えてとっとと寝ようと思い制服を脱ぎ、中に着ていたＩＳスーツの上を脱いだとき腹部に大きなあざができているのをシャルルは見逃さなかった。

「…巧どうしたのそのあざ…」

「なんでもねぇよ」

「でもそれは…」

「なんでもねぇ」

少しの沈黙の後寂しそうにシャルルは言う。

「そんなに僕を信用できないの……」

「……ああ信用できねぇな」

「ッ……そう…なんだ…」

「ああ、……何で男のふりなんてしてるんだ…」

巧がそう言いはなった瞬間、俯いてたシャルルが顔を上げ驚いた表情で巧を見る、相変わらず無愛想な顔だが真剣な目つきだった。

「…まぁそりゃあ信用できないよね…ごめんね」

その後シャルルはなぜ自分が男装しているか理由を語ってくれた。
二人目のＩＳを動かせれる男子としてデュノア社のＰＲ、
スマートブレイン社のＩＳを持つ巧と近づきもう一度スマートブレ

イン社と関係を持とうとしていること
【５５５】のデータを狙っていること。
もし自分が女であることがバレたらどうなるかを…全て語った。

「これで全部だよ……騙してごめんね。」

巧は全部聞いた後シャルルは謝る姿を見た後一言言った。

「つまり俺がお前が女ってことをばらさなけりゃいいってことだろ……寝るぞ。」

そう言って巧はベットに入ると寝た。
シャルルは唖然としていたがポツリと「無愛想な顔してるのに優しいんだね巧。」と言う。

「ああ気にすんな……って一言余計だ！」
互いに少し笑った後、二人は眠りについた。

18話（後書き）

○たっくん【巧】
×たっくん【琢磨】

ご感想ご質問ご意見お待ちしております。

19話

巧の部屋をＩＳ学園で知らないものはいない、それはラウラも例外ではなかった。
レールガンで吹き飛ばした後その場から消えた巧がどこに行ったなど限られている。
恐らく自分自身の部屋だろう、そう解釈しラウラはカイザフォンを握りしめ巧の部屋へ向かおうとしたときカイザフォンから着信音が聞こえ電話に出る。

「ラウラ君、もう一つのベルトは手に入れれたかね？」

「大佐、一度奴と剣を交えたのですか取り逃がしてしまい、奴の部屋に侵入し手に入れるところであります。」

「…私は奴と戦って、勝って奪えと言ったはずだが、」

「ですが奴は今弱っています、ここで倒した方が…」

「……今度、学年別トーナメントで私も観客として出席することになったんだ。」

ラウラは突然大佐が言い出したことに困惑しながらも、「それとこれにどういった関係が……」
と答える。

「なぁに今はわからなくて良い、そのかわり会場で最高の戦いの場

を用意すると約束しよう。」
大佐と呼ばれる男は続けて言う。
「だから、彼との戦いはこんなつまらない決着にはしないでくれ。」
「つまり乾巧とトーナメントまで戦うなと言うことですか……」
悔しそうにラウラは言うと大佐はなだめるよう言った
「すまない、ラウラ君だが頼むよ…」
「…了解しました。失礼します。」
そう言いラウラは電話を切ったあと壁を思いっきり殴った。

三日後

「学年別タッグトーナメント？」
巧は冷や奴定食をたべながら聞き返す。
「聞いてなかったんだ…山田先生の話…」
呆れながらもシャルルは巧に説明するが巧は冷や奴定食についていたみそ汁を冷やすことに集中していてまじめに聞いているように見えない。
「…ちゃんと聞いてる？」
「フゥーフゥー……何が？」

呆れているシャルルをよそに巧はみそ汁を飲むがまだ熱かったらしく一口のんだ後また冷ましてた。

「つまり誰かと組まなくちゃいけねぇってこったろ、めんどくせぇな…」

「じゃあ、僕と組まない？」

自分と組もうと言うシャルルに対し巧は聞き返す。

「いいのか、他のいろんな奴がお前と組みたがってんぞ。」

「…うん、でもほかの人だったらバレちゃうかもしれないから…」

「まぁ、お前がいたら心強いし、叩きのめしたい奴もいるしな…」

そう言って巧は遠くにいるラウラを睨みつける。

そしてタッグトーナメント当日。

「良かったじゃないかラウラ君一回戦だ、思う存分戦いなさい。」

「はい、大佐」

ラウラはそう言った後口元をニヤリと歪めた後アリーナに向かった。

１９話（後書き）

ＮＧ

「…了解しました。失礼します。」

そう言いラウラは電話を切ったあと
なぜか地面に落ちていた緑色のメダルを腹いせに蹴り飛ばした。

○＜このままではすまさんぞ。

何か声が聞こえた気がしたがラウラはその場を立ち去った。

ご感想ご質問お待ちしております。（５５５ネタじゃなくてすいません。）

２０話

二対二のＩＳ同士の戦い、学年別タッグトーナメント一回戦は巧、シャルルＶＳラウラ、篠ノ之
この狙ったかのような対決に会場は盛り上がる。

両者アリーナに向かうと試合開始の合図を待つ、

「乾、腹の調子はどうだ？」

「おかげさまでボロボロだ、…お前も胃薬か何か用意した方がいいんじゃねぇか。」

シャルルや篠ノ之は巧とラウラの意味不明な話についていけなかった。
シャルルが巧に聞こうとしたとき試合開始のブザーが鳴る。

巧はラウラにシャルルは篠ノ之に向かい手持ちの武器で撃ちまくる。
篠ノ之のＩＳ打鉄ではマシンガンを防ぐことができず剣で少しはじきながら回避行動に移る。
巧はフォンブラスターで撃ちまくるが全て停止結界、ＡＩＣによって防がれ
砂埃を巻き上げるだけだったがそれこそ巧の狙い。

「フン、無駄だこの停止結界、ＡＩＣの前では…」

ラウラが言い終わる前に砂埃の中から巧が現れ油断していたラウラの腹部にグランインパクトを叩き込む、ＡＩＣも間に合わずラウラ

は思わず後ずさるが巧はファイズエッジを展開し斬りつける。
ラウラのＩＳのシールドエネルギーぐんと減る。一度距離を離れ上空に行き巧を睨む
巧はその場を動かずただ上空に逃げたラウラをじっと見る。
ラウラはプラズマを発生させた手刀とワイヤーブレードを展開し一気に地上にいる巧に向かい降下する
巧は様々な方向から迫ってくるワイヤーブレードを避けるがだんだん装甲を掠めていき
ワイヤーブレードが巧の首を絞める。そして勢いよく引き戻されプラズマ手刀で巧は斬りつけられる。

ラウラは数回斬りつけた後レールガンを巧の腹に向け撃とうとしたとき
ラウラの背後が爆発する。
ラウラが振りむくとＩＳのシールドエネルギーが無くなり地面に倒れている篠ノ之と銃身から煙をあげ
グレネード弾をラウラに撃ち込むシャルルがいた。気がシャルルにいき少し、ほんの少し巧の首を縛る
ワイヤーブレードが緩くなったのを巧は逃さなかった。足にポインターをセットしラウラにむけて放つ
赤い円錐状の物がラウラの腹部に当たり首のワイヤーを引きちぎり
赤い円錐のなかに蹴りをいれるが
ラウラに気づかれＡＩＣで止められレールガンを撃たれ巧は上空に吹き飛ぶ。
だが背後からとてつもない衝撃がラウラを襲うシャルルの切り札のパイルバンカーがラウラのＩＳのシールドエネルギーを削りラウラは吹き飛ぶが
シャルルにレールガンを撃ちシャルルに命中しシャルルのＩＳが解除される。

ラウラは勝利を確信したとき自分の周りが突然暗くなる、不思議に思い上を見上げた瞬間
巧がファイズショットを構えながら落ちラウラに本日二発目のグランインパクトを叩き込む。
その瞬間、勝者を告げるアナウンスが流れた。

が、すぐにアリーナ全体にシャッターが閉じていき巧達は完全に閉じこめられる。
山田先生からの通信もノイズだらけになり聞こえなくなる。

「大佐…こんな絶好の場所を作っていただき…感謝します……変身」

よろよろとラウラは立ち上がった後、カイザに変身しカイザブレイガンを構える。

巧もファイズに変身し、手首をスナップさせて構える。

突然の出来事に篠ノ之もシャルルも唖然としている、アリーナに閉じこめられたかと思ったら
ラウラと巧が特撮ヒーローみたいな格好に変わり戦っているのだから。

カイザはファイズのパンチを受け止めると腹部に執拗に膝蹴りをいれる、
ファイズは腹部に膝蹴りをくらうと大きくよろめく、カイザは何度か蹴ったあと思いっきり殴り飛ばす
ごろごろと地面を転がるファイズを見ながらカイザショットにミッションメモリーを差し込みカイザフォンを開きＥＮＴＥＲキーを押しゆっくりとファイズに向かい歩く。

よろりとファイズが立ち上がった瞬間胸部にカイザのグランインパクトが炸裂しベルトが外れ巧は地面を転がる。

カイザはファイズギアを拾い上げる、すると後ろからパチパチと拍手の音が聞こえその場にいる全員が振り返るそこには鼠色の軍服を着た男が立っていた。

「ご苦労、ラウラ君。…そのベルトを渡してくれるかな…」

「はい了解しました、大佐。」

そう言いカイザはファイズギアを大佐と呼ばれる男に渡す。

「ああ、ラウラ君も変身を解除しリラックスしてくれたまえ。」

「はっ！」

敬礼した後ラウラはカイザフォンを引き抜き変身を解除するが同時に変身の完了を示すカイザギアより高い音が響いた後、ラウラの腹部を光線が突き抜ける。口元から血を流しながらラウラは振り返るとそこには鼠色の軍服を着た大佐ではなくファイズが立っていた。

「ふっふふふ、はっはっはぁはははは、いやいや実によくやってくれたねラウラ君。計画どうりだよ」

ファイズは大声で笑い、血を流して倒れているラウラを見ながら言う。

「いやいや本当にこんなにうまくいくとはとは思わなかったよ。」

「実は君が襲っていた乾君は本当は君の大好きな教官の弟を守って

いたんだよ、そして彼女の弟を誘拐したのは私だ。」

「つまり君は恩人の恩人を殺そうとしてたと言うわけだ。」

そのまま大佐と呼ばれる男は倒れているラウラに全てを言った。
自分はオルフェノクでオルフェノクを作る実験をしてたということ
だが失敗が続き資金が無くなりかけたこと、軍に資金を貰うためオルフェノクを集め一夏を囮に織斑千冬を呼び出しオルフェノクで世界最強のＩＳ操縦者を倒しオルフェノクの優位性を軍の上層部に認めさせようとしたがファイズという邪魔が入ったこと
だがファイズギアの強さに魅せられたこと、
そしてファイズギアによく似た壊れたベルト、カイザギアを見つけたこと
そのカイザギアをラウラに渡して変身させていたということ
そしてラウラは草加の様なオルフェノクと人間の中間の存在だと言うこと。そして最後に一言、

「いや、肝心なことを話さないのが私の悪い癖だ。」

それを聞き巧の拳に自然と力が入り怒りが沸いてくる。
その怒りは当然ラウラを騙していた鼠色スーツの男にいく。
何とか巧は立ち上がると鼠色のスーツの男を睨みながら叫ぶ。
すると巧の姿が変わる、その変化に全員驚きを隠せなかった。
その姿こそ巧のもう一つの正体【ウルフオルフェノク】だった。

２０話（後書き）

ＮＧ
ラウラが言い終わる前に砂埃の中からニーサンが現れ油断していたラウラの腹部にパンチが叩き込まれる
（＾Ｕ＾）＜どうした変身しないのかラウラ？

…本当にすいません。
ご感想ご質問お待ちしております。

21話

「…二人とも下がってろ…」

目の前の怪物(ウルフオルフェノク)はシャルルと篠ノ之に言うと一瞬構えた後一気に最高時速で
ファイズの懐に入り殴る、ファイズはよろめきながら拳を振るうが全て避けられ蹴りを食らう。

「ほぅ、君もオルフェノクだったのか…それもその強さ、最高だ…欲しいくらいだ…」

ファイズはそう言った後時速三百キロで迫るウルフオルフェノクの繰り出すパンチを受け止め
顔面を殴りつけて言う。

「だが、私を殺そうというのならば話は別だ！」

もう一度ファイズはウルフオルフェノクにパンチをしようとしたとき、
ウルフオルフェノクの両足キックを食らい掴んでいた手を離し後ずさる。

巧はチラリとラウラの方を見る、背中からファイズフォンで撃たれたのだ出血がひどい、
早めにかたづけたかったが相手も中々手練れだ、そう簡単には倒れないだろう。
そしてこいつを倒しても自分はもうここには……

巧は急いで思考を切りかえ目の前の敵を倒すことに集中する。

巧が怪物になったのを見てシャルルと篠ノ之は驚愕する。
周りからは代表候補生と言われているが実際はまだ子供だ、いや大人でもこんなことに直面したら何もできないだろう。シャルルと篠ノ之はただ現実味のない現実をただ見てることしかできなかった。

「シャルル！篠ノ之！ラウラの手当を頼む！」

目の前の怪物が大声で言うが篠ノ之もシャルルも目の前の怪物が巧だと信じれなかった。
自分の名前を呼ばれても動けない、早くしないとラウラが死んでしまうかもしれない、
それでも動けない、その間に怪物は傷つけられていく。

だがそこでシャルルは気づく、怪物が一歩も下がらず赤いラインの男と戦っているのか、それは後ろに自分達がいるからだ赤いラインの男は自分達も口封じ、殺すつもりでいる。だから怪物、巧は自分達を守るために戦っている…そんな気がしてシャルルは篠ノ之を連れラウラの方へ走る。
シャルルは自分の知っている知識をフルに使い適切な手当をラウラにする。

「うぉぉぉぉ！」

巧は叫んだ後一気に最高時速で走りファイズを掴みシャルル達から遠ざけファイズを壁に叩きつける。

時速三百キロで体当たりされたファイズはさすがにダメージも大きかったらしくよろめくその隙に強烈な一撃、蹴りを腹部に叩き込むとベルトが外れて大佐と呼ばれる男が倒れるがすぐに起きあがりソードフィッシュオルフェノクに変化し二本の剣を構えウルフオルフェノクに襲いかかる　が、剣を弾かれソードフィッシュオルフェノクの腹部に拳がめりこみ青い炎が全身にひろがる。

「…化け物め……」

ソードフィッシュオルフェノクはそう言い残し灰となった。

一本の剣は弾くことができたがもう一本の剣が巧の肩に突き刺さっていた。
それを引き抜き地面に放り捨て姿を戻し先ほどまで敵であった灰を見ながら、ポツリと

「お互い様だ…」

と呟きそこで巧の意識は途絶えた。

「ああ、乾、目が覚めたか。」

目が覚めるとそこには真っ白な天井に真っ白なシーツに自分の今の格好、総合するとここは…

「…病院か。」

「保健室だ。」

織斑先生との会話の後しばらくの沈黙、
そしてその沈黙を破り織斑先生は巧に言う。

「よく耐えたな。話は小娘共と木場社長から全て聞いたぞ。」

巧はただ黙って織斑先生の話を聞く

「やはり、ＩＳが記録していた映像を見てもオルフェノクという存在はまだ信じられないがな。」

「それで、オルフェノク…とやらはＩＳに乗れるらしいからな、お前の存在がここには必要だ。」

「これからも頼んだぞ。」

織斑先生はそう言うとファイズギアを机の上に置くとそのまま立ち去った。

……巧はこれからどうなるのか考えたあのとき自分の姿をシャルル達に晒してしまった少なくとも恐れられ、自分に近づかなくなるだろう。

ふぅ、と溜息をしたあと巧はまたごろりと転がりそのままもういちど眠りについた。

21話（後書き）

NG

「これからも頼んだぞ。」

織斑先生はそう言うとスマートバックルを机の上に置くとそのまま立ち去った。

……巧はこれからどうなるか考えた、多分途中でやられるだろう。

ご感想ご質問お待ちしております。

22話

タッグトーナメントから二週間、その間にいろんなことがあった。

まずスマートブレイン社がデュノア社と合併しシャルルは自分の性別を偽らなくても良いようになった

これは巧が木場に頼んだわけでなく、木場がシャルルのことを聞いてやってくれた。こんなことをしてスマートブレイン社の利益は大丈夫か？と思い聞いたら

「スマートブレイン社に損害はないよ。」と木場は少し笑いながら言った。

……この男は本当に優しくて、人を愛する自分の盟友の木場勇治そのものだ。

巧はこの世界だったらオルフェノクと人間が手と手を取り合う世界が見れそうな気がし目頭が熱くなる

ラウラはフォンブラスターで腹を撃ち抜かれたが順調に治っていっているらしく

傷も残らないらしい。カイザギアはラウラが持ち、いざというときに使うらしい。

巧が病院…もとい保健室にいるときにやってきてそれを伝え、自分のやったことを謝って去っていった

シャルルはちょくちょく見舞いに来てくれた。最初は巧を恐れていたのかあまり見舞いに来なかったが

あるとき見舞いに来て言った一言。

「…たとえオルフェノクだとしても…巧は巧だよね。」

言葉に言い表せないが巧はその言葉がとても嬉しかった。
オルフェノクだとわかってもいままでどうりに接してくれた、それがとても嬉しかった。

そして周りは巧が退院…怪我が完治したと言うことで退院パーティをしてくれた。
巧はぶっきらぼうな態度だったがいつもよりすこし愛想がよかった。

同時刻、とある海沿いの旅館近くの砂浜。

「た、頼む！助けてくれ！、む、娘だけは！娘だけは！！」

男は目の前の異形な怪物（シャークオルフェノク）に頼む様に叫ぶが怪物は男の喉元をつかみ無理矢理立たせると触手の様な物がゆっくりと男の口元にむかい伸びていく男のすぐ後ろにいた少女は泣き喚き助けを求めるが誰も来ない
怪物が笑いながら口の中に触手をいれようとしたとき怪物の腹から剣のような物が突き出る。
男の喉元を掴んでいた怪物の手が少し震えたあと手の先から灰になっていき捕まれていた男がむせながら地面に落ちる。

少女は自分の父親を助けてくれたのは誰だろうと思い見つめるが、少女を助けたのはさっき父親を襲っていたのと同じ灰色の怪物だった。

「…大丈夫ですか？」

怪物はごつごつした手を男に向けるとコツン、という音と共に頭に何かが当たるのを感じた。
顔を上げるとまた小石がこつんという音を立て怪物の頭に当たる。

「お父さんに近づくな！」

少女がそう言いながら小石を掴んでは怪物に向かい投げる。
父親らしき男は少女を抱きかかえ遠くへ走っていき離れた位置に止めてあった車に乗ると猛スピードで去っていった。

怪物は学生くらいのようなの姿に変わるとふぅ、と溜息をして呟いた。

「そりゃあ、端から見りれば俺も立派な怪物だよなぁ……」

そう言ったあと学生くらいの男、織斑一夏は旅館の方へ歩いていった。

２２話（後書き）

ご感想やご質問等を感想に書き込んでもらえると先着六名様のオルフェノクに
スマードバックルを差し上げます。

…なんかすいません。
ご感想ご質問等、お待ちしております。

23話

「来週の臨海学校に行くバスの席決めをしたいと思いますのでこのくじを引いてくださ〜い！」

今日も元気に山田先生が言うと一斉にくじの周りに女子が集まりもみくちゃになり山田先生が女子の大群に埋もれる。

ほとぼりが冷めたらゆっくりくじを引こう、そう思い巧は机に突っ伏した。

「おい乾、」

ふと声をかけられ起きあがると織斑先生がいた。

「乾、確かお前はバイクを持っていたな、それに乗っていけ。」

「「「「えええええええぇぇぇ！！」」」」

「なんで、乾君だけ違うんですか！」

「どうして乾君はバスに乗らないんですか！」

「ハッ、これもゴルゴムの仕業だ！」

「いや、ディケイドだ！」

何人か様子がおかしい生徒がいたが無視して織斑先生が理由を説明する。

「巧のＩＳ【５５５】の装備の一つにあのバイクがある、あれは独立戦闘支援ユニットだからな。持って行く必要がある。」

臨海学校ではＩＳの装備試験運用とデータ取りが行われる、だからオートバジンに乗って行くのは必然。

まぁ表向きの理由はこんな感じだ。

その理由と共に万が一オルフェノクの襲撃にあってもより安全に生徒を守ることができる。

そう言った理由もある。

理由を言ってもなかなか引き下がらない生徒は数秒後、出席簿でダイナミックチョップされていた。

「しっかし、ここんとこ全然使って無かったから汚ねぇな…」

巧は外に出したオートバジンを見て呟く、入学してから数回しか使ってない、最近はずっと格納庫に入れっぱなしだったのでホコリがかなりついていてＳＩＣ版の様な色になっている。

スポンジと洗剤が入ったバケツを地面に置き、真ん中のボタンを押す。

すると機械音と共にバイクが人型のロボットに変わり頭部のバイザーが発光する。

巧は変形したオートバジンの手にスポンジを持たせると

「自分で洗っとけ。」

と言って巧は洗い流すときに使うホースを取りに行った。
端から見ると…どこから見ても不思議な光景だった。ロボットが機械音をたてながらスポンジを使い、自分で自分の体をゴシゴシとこすっていた、その後巧が泡だらけになったオートバジンの体を洗い流し
乾いたタオルをオートバジンに渡し、

「自分で拭いとけ。」

と言い立ち去った。
ピカピカになって水滴がしたたり落ちる体を無言で拭く姿はとても哀愁を感じさせる背中だった。

２３話（後書き）

次回は水着回、京水さんのポロリもあるよ！

ご感想ご質問してくれる人……嫌いじゃないわ！

２４話

七月　ＩＳ学園一年の生徒は【臨海学校】に二泊三日の合宿に行きＩＳの各種装備試験運用とデータ取りを行うが一日目は丸々自由時間だ。それに臨海学校の名前のとうり、近くには日本の海でもかなり綺麗な
海がある、だから女子はほぼ全員水着に着替えて海で泳ぐ
一人の女子が浜辺に向かい走り、海を眺めながら一言、

「…宇宙キター！」

「宇宙！？」

「ここ海だよ！」

一人の女子が両手を空高く挙げ思いっきり叫び周りの女子がつっこみをいれる。

ＩＳ学園の女子は皆、海で泳いだり、肌を焼いたりビーチバレーなどの思い思いの時間を過ごしていた。

巧は浜辺にあるパラソルの下でそれをボーッと見ていた。

「乾さんは泳がないんですの？」

ふと後ろから声をかけられるそこにはセシリアが立っていた。

「いや、気が向いたら泳ぐ。」

そう言うと巧はまたボーッと海を眺めた。
セシリアが立ち去ってしばらくして巧は立ち上がり適当に周りをぶらつく。

「あそこのブイまで一番速く行った人が最下位の人にジュースを奢るってことで、…よーいどん！」

鈴はそう言いブイに向かい泳ぐと何人かの周りの女子も急いで泳ぎ出す。
他の女子にぐんぐん差をつけて鈴は一番になる
ブイがある方はだいぶ水深が深くちょとしたスリルもあったのであまり泳ぎに自信がない女子は途中でリタイヤしていく、鈴がブイに近づいたとき海底に何かが落ちているのに気づき少し気になったので潜ってみる。
あったのは人形のようだが、服が焦げていて髪の毛がなく、何とも言えない不気味さがあった。
確認した後、水面に戻ろうとしたとき足に激痛が走り口を開けてしまう、当然海水が鈴の口の中に大量にはいり、溺れる。助けは呼んでも水の中で誰にも聞こえない他の女子と距離と離しすぎたので鈴が溺れていることに気づいたとしても遅い、
薄れゆく意識の中、灰色の何かが水底を歩き自分に向かってくるのが見え、そこで鈴の意識は途絶えた。

「…い……おい！…大丈夫か？」

声が聞こえ鈴はまだボーッとするが声の方向を見る。

「…乾？」

「…どうしたんだよ、何でこんなとこで寝てるんだ？」

鈴はあたりを見回すとそこはみんなが遊んでいる浜辺からすこし離れた、人目につかない位置だった。

「あんたが助けてくれたの？」

「…何の話だ？」

「本当、素直じゃないわね、あんた。」

「ちょっと待てよ、本当に何の話だ？」

最初はまたごまかしているのかと思ったが、この反応は本当に何も知らないようだった。

「…あんたが助けてくれたんじゃないの？」

「…だから何の話だ！？」

「適当にぶらついてたら倒れているお前を見つけただけだぞ。」

巧はそう言うと「わけわかんねぇ」とぶつくさ言いながら鈴の前から去っていく。

（じゃあ私を助けたのって一体誰…？）

そんなことを考えながら鈴はみんながいる浜辺に戻る。

巧も鈴も気づかなかったがすぐ近くの浜辺に異形の足跡があったが波にのまれ消えていった。

２４話（後書き）

フォーゼ始まりましたね。今までのライダーとはまた違ったベクトルで面白かったです。
明日は小説家になろうのメンテナンスがあるので更新が遅れるかもしれません。
ご感想ご質問等ございましたら感想に書き込んでください。

25話

タッグトーナメント事件の後から、篠ノ之箒はずっと考えていた。
シャルル・デュノア、もといシャルロット・デュノアにあっという間に倒されたこと。
悔しかったが自分はＩＳを生み出した篠ノ之束の妹だからと言う理由で無理矢理入学させられたのだから
たいした問題では無い。

問題はその後だ…灰色の怪物の男にラウラが撃たれたとき自分は何もできなかった。
乾巧が灰色の怪物になって私達を守ってくれたときもただそこで見ていることしかできなかった。

自分の無力さを感じた。そしてすぐに思った…力、専用機が欲しいと、

専用機持ちになればもうあのときみたいにただ見ているだけなんてことは無くなる。
…それにもしかしたら専用機持ちのコネで、一夏に会えるかもしれない。
そんなことを考えていたらいつの間にか、自分が嫌っていた姉に連絡を取っていた。

「…明日だ、明日私は力を…」

一人篠ノ之箒は星がよく見える夜空を見ながら呟いた。

「ふぅー、ふぅー」

巧達は旅館で夕食を食べていた、夕食のメニューは刺身など新鮮な海の幸をつかったものなどでとても
おいしい、が巧は夕食の中にあった小鍋の具と味噌汁を淡々と冷やしていた。
その様子にみんな慣れたのか誰も反応しない。

「ねぇねぇ、見た？厨房にいる男の子、かっこよかったよね～」

「えぇ～私も見たい、どんな感じの子なの～」

「たしか名前は尾上…なんとかだったよ。」

ふと後ろから女子の声が聞こえるが特に気にしず、また味噌汁を冷ます作業に戻る。

翌日、巧、セシリア、鈴、シャルロット、ラウラ、篠ノ之、更識、の7人が集められた。

「よし、今からそれぞれの特殊装備のテストをして貰う。」
ここには専用機持ちが5人となぜか専用機持ちでない篠ノ之がいた
そのことを不思議に思ってセシリアが聞く
「織斑先生、なぜ篠ノ之さんがこの場に？」
「ああ、それはな……「篠ノ之束ってヤツの仕業なんだよ～」
織斑先生の話を遮りウサギの耳の様なものが頭についた女性が現れる。
「いやーちーちゃん、会いたかったよ～さぁハグハグしよう、もっと私を笑顔にして……ゴフッ」
「…いい加減にしろ。束」
束という女性の腹に織斑先生の拳がめり込み倒れるがすぐに立ち上がり、箒の方を向き大声をだす。
「ハッピーバースデイィ！！箒ちゃん！これは私からの誕生日プレゼントだ、受け取りたまえ！」
そう言ってラッピングが施されてる小箱を箒に渡す。
箒は小箱を開ける、その中には、赤、黄色、緑のメダルが3枚入っていた。
「……なんですかコレは…？」

「あ、間違えちゃった、え～っと、あったあったコレだコレ、はい【紅椿】」

メダルを回収するとどこからともなくＩＳを出す。

「第四世代ＩＳ【紅椿】！！」

２５話（後書き）

専用機持ちが集まったとき更識というキャラクターが出てきましたが彼女は更識簪という原作７巻に登場する専用機持ちのキャラクターです。
ＩＳ本編だとこのとき出てきませんでした。
ＩＳ本編では彼女のＩＳ打鉄二式は白式を作っていたせいでこのとき完成していません。
しかしこの小説だと白式がいない＝倉持技研が打鉄二式に専念できるんじゃないか
＝打鉄二式完成するんじゃないか＝更識簪さんいるんじゃないか＝なら名前だけでも出すか

ということで登場しました。ご感想ご質問等お待ちしておりんす。

26話

「あれが第四世代…！？」

その場にいる何人かは声をあげる。
当たり前だ、殆どのＩＳ企業はまだ第三世代を開発でき始めたというのに目の前のＩＳは
第四世代なのだから、世界中のＩＳ企業を馬鹿にしているとしか思えない。

「そう！この紅椿はパンチ力４０ｔ！キック力８０ｔ！ジャンプ力は１００ｍ！走る速さは１００ｍを何と１秒！！」

「すごく強(つよ)いぞぼくらの紅椿(あかつばき)！」「がんばれ地球(ちきゅう)の平和(へいわ)をまもるため！」

第四世代のＩＳをまるで子供向け雑誌で紹介されるヒーローのように説明していくので、周りの専用機持ちたちは唖然としていた。

「はぁ…そのスペックはでたらめに言っているだろう…。」
織斑先生が溜息をつきながらそう言うと、

「うん！！」

と、無駄に元気に返事をし、紅椿のフィッティングとパーソナライズの準備を始める。

「準備完了！さぁ、振り切るぜ！！」
そう叫んだ後、６枚のディスプレイと６枚のキーボードを出し尋常じゃない速度で打ち込んでいく。

「よし！完成ー！っとと、そうだアレ言わなきゃ　絶望が、お前のゴールだ……よし、それじゃ箒ちゃん。」

「君の力だよ、飛んでみて！」

「―やれる！この紅椿ならッ！」

上空にいる紅椿はあっという間に目の前にあるミサイルを切り裂き十六発全てが鉄くずに変わる

「なら次はこれっ！【多目的巡航～ミサイル、ギガント～】」

四つのミサイルがかなりの速度で紅椿へ飛んでいくが一瞬で切り裂かれ紅椿の背後で爆発する。
その光景にその場にいる全員が驚愕する。

「……凄い、この力さえあれば私はもう……」

誰にも聞こえなかったが箒は刀を握りしめながら呟く。

「たたた大変で、「バタッ」ぷぎゅ…大変なんです織斑先せ「ドサッ」むぎゅ……これをっ！」
１０ｍほどの砂浜で二度も転びながら慌てた様子の山田先生がやってきて織斑先生に小型端末を渡す。

（あんな短い道のりでよく二回も転んだ「きゃふっ」…海草踏んでまた転んだよ）
巧は尻餅をついている山田先生に呆れながらも手を貸す。

「おい、大丈夫か？」

「あ、ありがとうございます。」

しばらくて織斑先生が表情を曇らせながら言う。

「専用機持ちども、全員わたしについてこい！他の生徒は全員指示があるまで旅館で待機と命じておけ」

あまり状況が飲み込めずに専用機持ちは織斑先生の後をついていく、巧はオートバジンに先に帰っているように命令し織斑先生の後をついていった。

２６話（後書き）

ご感想ご質問があれば感想に書き込んでもっと僕を笑顔にしてよ。

27話

「ＩＳ学園さんの人たち凄いピリピリしてますよ、何かあったんですかね？」

旅館の従業員の一人が自分より若い男に話しかける。

若い男は少し、ほんの少しだけ顔を苦い顔をしてから自分と同じ従業員に言う。

「…敬語はやめてくださいよ、まぁ俺には…俺たちには関係のないことでしょうし働きましょうよ。」

「やっぱり働き者だね～尾上【一夏】さんは。」

と、笑いながら言うとお互いに少し笑ったあと仕事に戻った。

「…というわけだ篠ノ之、乾、頼んだぞ。」

「はいっ！」　「……ああ」

やけに気合いが入った箒の返事とは対照的に巧の返事はいつも以上にやる気が無かった。

それもそのはず、よその国の他人が自分達のＩＳが暴走したので止

めてくれと
ＩＳ学園に頼んできたのだ、いくらなんでも横暴すぎる。
しかもその暴走ＩＳを止めるために巧と篠ノ之、生徒が選ばれたということが巧をより苛つかせた。
それに……

「なんだ、乾、そんなにやる気が無いようなら止めても良いんだぞ。私一人で十分だ。」

「…うるせぇ」

こいつは、篠ノ之箒はやけに強気、と言うより浮かれているようだった。
これからもしかしたら死んでしまうかもしれないし、大怪我をするかもしれないというのに笑っているのだ

「時間だ…いくぞ紅椿！」

そういって箒は巧と共に遙か先の暴走ＩＳの居るところに飛んでいった。

暴走ＩＳが視認できるとすぐに巧はポインターを撃ち込み暴走ＩＳ、福音の動きを止める。
そして思いっきり赤い円錐の中に蹴りをいれる、そして紅椿が斬りつける。
作戦は【一瞬で倒す】とシンプルなものだったが、これだったらすぐに仕留められる。

福音はまるで羽がちぎられた鳥のようにくるくると回転しながら海に落ちる。
箒は剣を握りしめながら勝利を確信したような表情だったが、
巧は落ちた位置を凝視していた、まだ終わっていない、そう直感的に感じたから。

突然巨大な水の柱があがり、中からさっきとは若干形の違う福音が現れる。
一瞬でこちらを向き巧達を見た後、驚異的な速度で向かってくる。

「ッ！速……」

箒が言い終わる前に紅椿を福音の羽のようなエネルギーの弾が襲う。
そのとき横から【５５５】が現れ箒を突き飛ばす、当然【５５５】がエネルギー弾を全身に食らう。
【５５５】の装甲は所々溶けていて火花を散らしながら落ちていく。
落ちていく【５５５】を見て箒が巧に声をかけようとしたときハイパーセンサーが福音が迫ってくるのを知らせる。

「うぉぉぉぉぉ！」

箒は刀で福音の頭部を狙い振り下ろす。カギンッ！という音と共に福音の頭部に火花が飛ぶ、小さいヒビが福音の頭部にできる。
箒がもう一本の刀で福音の胴を斬りつけようとしたとき福音が箒の腹に蹴りを入れ距離を取る、そして巧を襲ったものと同じエネルギー弾を撃ち込もうとする、が、撃つ前の予備動作を見ていた箒は瞬間加速のような動きで避けて、再びヒビがはいった頭部に刀を振り下ろそうとする。

しかし、福音はまるでその攻撃を待っていたかのような滑らかな動きで紅椿の両腕を掴み、エネルギー弾を発射しようとする、箒の目の前に【危険】という文字が出て警告音が鳴る。
必死に福音が掴んでいる腕を振り払おうとしたがびくともしない。

「一夏ぁ……」

箒が諦めたようにポツリと呟くと、
福音の腹部に光線が当たる、福音と箒が光線のきた方向を見るとファイズがボロボロの状態で飛んでいた。
ファイズは一気に距離を詰めてファイズショットと【555】のファイズショットを両手に展開して福音に
近づく、するとファイズの赤いラインの色が銀に変わり目の色が黄色から赤に変わる。

その瞬間その場からファイズが消えた。

箒が唖然としていると、急に福音が紅椿から離れる、というより吹き飛び全身がベコベコにへこんでいき、装甲が幾つか吹き飛ぶ。
10秒くらい経っだろうか、ファイズの姿が現れると共に電子音が鳴り元の赤いラインのファイズに戻る。

と同時に福音が火花をたてながら爆発し爆発の中から操縦者が落ちていく。
箒は急いでその操縦者を受け止めると一息つき、巧に話しかけようとしたとき、
【555】も限界がきたらしく展開が解除され箒の横をファイズが落ちていく
箒が慌ててファイズも掴もうとしたとき、
どこからともなく現れたオートバジンが落ちてくるファイズを抱き

かかえる。

「…ったく、遅ぇぞ、バジン」

疲れたように巧が言うとオートバジンはバイザーを数回光らせ、ゆっくりと旅館に巧を運ぶ。

…その後、巧が自分でオートバジンを洗車していたのはまた別の話。

27話（後書き）

NG

福音はまるで羽がちぎられた鳥のようにくるくると回転しながら海に落ちる。

福音（ロスト）「そんな、僕の…僕のコアがぁぁぁぁぁぁ！！」

箒「…何だ、今の？」

ご感想ご質問等は感想に書き込んでください。

28話

「……痛ってぇ…」

巧は一人旅館で休んでいた。
それもそうだ、福音の攻撃を至近距離でくらったのだ、いくらＩＳのバリアが優れていようとも
無傷でいられる訳がない、体に数カ所火傷を負って巧の体はボロボロだった。

目を瞑りベットに体を預け寝転がると窓から吹く風が巧の頬に当たるその風は…
……生ぬるく、眠りに落ちかけていた巧を一発で起こす騒音も聞こえた。

「…うるせぇぞ！」

窓の外でバトルモードで飛んでいたオートバジンの胸に、巧は手元にあった缶コーヒーをぶつけると，　オートバジンは電子音ともにバイクに変形して地面に落ちる。

「ったく……ん？」

巧はファイズフォンが鳴っているのに気づき手に取る。ラウラからだった。

「乾！オルフェノクが二体現れた！悪いがお前も来てくれ、片方のオルフェノクは手強い！」

巧は気だるさが残る体を無理矢理起こしてラウラの援護に向かう。
…よくよく思えばあのときのオートバジンはこのことを知らせようとした気がするが
今はそんなことどうでもいい。
ファイズに変身し窓から飛び出しオートバジンに跨りラウラ達の方向に向かう。

しばらくしてファイズはオートバジンに急ブレーキをかける。
理由は目の前に知り合いが立っていたから、

「…どけ、急いでんだよ。」

巧は簡潔に目の前の女性に言う。

「貴様は休んでいろ、私がやる。」

そう言うとその女性はＩＳを展開し飛んでいった。

まるで蛙のような灰色の化け物が一人の少女を追いかける。
少女の靴は浜辺で歩くには何も問題は無かったが走るとなるとその

靴は不自由すぎた。
浜辺の砂に足をとられ少女はつまずく、
急いで起きあがろうとしたときフロッグオルフェノクに少女は足を掴まれる。
フロッグオルフェノクが少女を自分と同じ種類（オルフェノク）にしようと手を伸ばそうとしたとき
フロッグオルフェノクの体が「く」の字になって吹き飛ぶ、フロッグオルフェノクはごろごろと地面を転がったあと自分を突き飛ばした相手を睨みつける。

そこには自分と同じ、オルフェノク、タイガーオルフェノクが立っていた。
タイガーオルフェノクは少女に首を軽く動かし「逃げろ」とジェスチャーをして剣を生成しフロッグオルフェノクに向ける。少女は立ち上がり二体の化け物の前から走り去る。

「…おいおい、なんだよアンタ、せっかくこんな力を手に入れたのに邪魔しやがってさぁ」

「……」

フロッグオルフェノクは舌打ちをして目の前のタイガーオルフェノクに言うが返事はない。
ふぅ、とフロッグオルフェノクが顔を横に向け溜息をした瞬間、目の前のタイガーオルフェノクが自分の懐にいた、気づいたときにはもう遅く胴に重い一撃をくらう。
一閃、そんな言葉が頭をよぎるほど速く手に持っている剣を使い、剣道のような動きでフロッグオルフェノクを追いつめる。実力の差は誰から見ても圧倒的だった。

ラウラが駆けつけたとき既にフロッグオルフェノクは虫の息だった。
最後に流れるように滑らかな、だが重く鋭い一撃がフロッグオルフェノクの頭部に当たり青い炎を出し灰になる。

そのどこか見覚えのある動きに唖然としていたラウラだったが思考を切りかえカイザに変身し、タイガーオルフェノクの前に立ち、カイザブレイガンを構える、が
タイガーオルフェノクはカイザを無視しその場を離れようとする。
まるでカイザと戦う気が無いようにその場を去ろうとするタイガーオルフェノクをカイザは逃さない。
カイザブレイガンを持ち距離を詰め、切り裂こうとしたときタイガーオルフェノクは剣を捨て両手を広げる、それを見てカイザブレイガンをタイガーオルフェノクに当たるギリギリで止める。

「なぜ剣を捨てた、答えろ！！」

そう言ってラウラは目の前のタイガーオルフェノク見る。
タイガーオルフェノクはしばらくの沈黙の後、ポツリと呟く

「…俺は人は襲わない…傷つけたくないからだ。」

ラウラはそのとき不意に巧の姿が目の前のタイガーオルフェノクと、かさなったように見えた。
カイザは武器をおろすと言った。

「お前も、人を守りたいと思うオルフェノクなのか…？」

タイガーオルフェノクがコクリと頷く。
カイザは変身を解除してタイガーオルフェノクを見つめる。

ラウラはこれまで教官、織斑千冬に汚点を生んだオルフェノクを憎み、オルフェノクは全て敵と思ってきたが、オルフェノクでありながら人を守ろうとする乾巧に会ったことでその考えが徐々に変わっていった。

が、変身を解除したところでタイガーオルフェノクがラウラを横に突き飛ばす。

何とか受け身をとったラウラは今までの気持ちを裏切られた気がし怒りに満ちた目で突き飛ばした相手を睨む、とそこには刀で腹部を突かれ吹き飛ぶタイガーオルフェノクがいた。

タイガーオルフェノクに刀を突き立てたのは最新型の真っ赤なＩＳ紅椿が立っていた。

２８話（後書き）

ＮＧ

巧は一人旅館で休んでいた。
それもそうだ、福音の攻撃を至近距離でくらったのだ、いくらＩＳのバリアが優れていようとも無傷でいられる訳がない、体に数カ所火傷を負って『俺のの体はボドボド』だった。

目を瞑りベットに体を預け寝転がると窓から吹く風が巧の頬に当たるその風は…
……生ぬるく、眠りに落ちかけていた巧を一発で起こす騒音も聞こえた。

「…うるせぇぞ！」

窓の外でバトルモードで飛んでいたオートバジンの胸に、巧は手元にあった缶コーヒーをぶつけると、
オートバジンは電子音ともにバイクに変形して地面に落ちる。

バジン「いけないなぁ、そういった態度は…」

巧「」

束「あのバイクに適当にＡＩをつけてみたよ！」

巧「外せ、今すぐ！」

29話

紅椿の刀がタイガーオルフェノクに当たるたび火花が散り、タイガーオルフェノクの体が宙に浮く。
無様に地面に倒れたタイガーオルフェノクが立ち上がるのを待ち、立ち上がった瞬間、喉元に突きをいれるが、タイガーオルフェノクは素早く剣を使い、防ぐ。
だが、ＩＳでの突きは凄まじく、タイガーオルフェノクは後ろに吹き飛ばされる。

（…いけるッ！　もうあのときの様に見ているだけじゃなくなった！）

箒は心の中で叫ぶ、あのときのタッグトーナメントのようにただ見ているということはない。
もう、乾やボーデヴィッヒ達に頼らなくてもこの紅椿なら、私は…

「貴様（オルフェノク）を倒せる！！」

そう言い、二本の刀でタイガーオルフェノクを何度も斬りつける。

（…なんだ？　急にあのオルフェノクの動きが遅くなった？）

ラウラは紅椿とタイガーオルフェノクの戦い、というより紅椿の一方的な攻撃を見ながら思った。
軍人であるラウラは相手の動きを見て、だいたい相手がどんな攻撃をするのか、
自分と比べて相手が強いのか弱いのかを考えたりする。
あのタイガーオルフェノクは確実に自分より戦闘経験があり、力も技術もある。

なのに紅椿のサンドバックにされている。なぜだ？答えは簡単、あのとき、

『お前も、人を守りたいと思うオルフェノクなのか…？』

という問いに頷いたから、
そんな理由、以前の自分が聞いたらどうだろうか？でも今はこれが正しいと思う。

あのオルフェノクは人を守りたいと思うから人を傷つけるオルフェノクと戦う。
たとえ人に傷つけられ、見下され、迫害されても彼は人を傷つけないだろう
彼は人を助けるが、彼は誰が助けるのだろう？
気がついたらラウラはカイザフォンを握りしめていた。

「はぁぁぁぁっ！！」

紅椿の刀がタイガーオルフェノクを吹き飛ばす。
砂浜をごろごろと転がりタイガーオルフェノクは立ち上がろうとしたが
あまりにもダメージが大きすぎた、すぐに膝が折れ砂浜に倒れる。

「とどめだぁぁぁっ！」

箒が叫び、刀をタイガーオルフェノクの首に振り下ろそうとしたとき、
カイザが紅椿を止める。
箒は力任せにカイザを放り投げるともう一本の刀をカイザの喉元に向ける。

「なぜ邪魔をしたっ！怪物（オルフェノク）を庇うのか！」

「違う！こいつは人間の心を持っている、怪物なんかじゃない！」

「…黙れっ！」

刀でカイザを斬ろうとした瞬間、カイザブレイガンから光弾が飛び出て紅椿の全身を拘束する。
カイザの必殺【カイザスラッシュ】は本来相手を拘束した後にカイザブレイガンで斬りつけるものだが
紅椿には拘束しただけだった。

箒は紅椿ですぐに拘束を破壊し、変身を解除したラウラを睨む。
ラウラと、もめているうちにいつの間にかタイガーオルフェノクは姿を消していた。

よろよろとタイガーオルフェノクはズキズキと痛む体を無理矢理動かし、
少しでもさっきの場所から離れようと歩いていた。
しばらくして人が居ないのを確認し【織斑一夏】の姿に戻る。
この姿で傷つけないため、名前を偽り、自分の大切な人の周りから離れたのに
こんな突然に知り合いに会うなんて思ってもいなかった一夏は笑う。
しかも幼なじみで親友、顔と髪型ですぐに篠ノ之箒だってわかったが箒はすっかり変わりはてた俺の姿をみて、俺だと気づかなかったらしい、
安心したと同時に深い悲しみを感じた。

「…『怪物』かぁ…知り合いに言われると、死にたくなるな…」

一夏はそう呟くとゆっくりと意識を失った。

２９話（後書き）

ご感想ご質問等は感想に書き込んでください。

解説？

『織斑一夏』

世界最強のＩＳ操縦者、織斑千冬の弟。
家事全般が得意、やたらと女性に好意を抱かれるが本人は無自覚

第二回モンドクロッソ開催時にドイツのオルフェノク部隊に誘拐される。
誘拐の目的はオルフェノク部隊のリーダーはオルフェノクの優位性をドイツ軍上層部に知らしめるため
世界最強である織斑千冬を誘き出し倒して、人間をオルフェノクに変える実験費を貰うため。

だが誘拐場所で乾巧の邪魔が入り計画は失敗したが、
事故により織斑一夏は『タイガーオルフェノク』として覚醒。
オルフェノクになって周りの人間を傷つけてしまうのではないかと恐れて
周囲から去る。

現在『尾上一夏』という偽名を使い旅館で住み込みで働いている。
剣道の練習は今も続けている。

人を襲うオルフェノクとは何度か戦っているため経験値も高い。

やっぱり女性からの好意には鈍感。

『鼠色のスーツの男、大佐。　４９歳』

２９歳でオルフェノクに覚醒し、オルフェノクの力で何人も葬ってきた。
常に冷静で経験豊富、人望もあり、その実力は上位のオルフェノクと同等。

織斑一夏誘拐事件のときにファイズブラスターの攻撃に吹き飛ばされて以来
ベルトの力に魅入ってしまう。

その後任務で世界各地を回っている最中、壊れたカイザギアを拾い、復元。
ＩＳ学園にいると噂されているファイズからベルトを奪うため
ラウラ・ボーデヴィッヒにオルフェノクの記号を埋め込みカイザギアを使わせた

やっとの事でファイズギアを手に入れた大佐だったが、
ウルフオルフェノクの攻撃により死亡。

『オートバジン』

本作のメインヒロイン。

何故かオルフェノクの王に破壊されたままの姿で発見され
スマートブレイン社により復元される。

自分の主人のためならまわりの制止を振り切って福音と戦っている
巧を助けに行ったり
人を襲うオルフェノクからＩＳ学園の生徒を守ったりもする。

自分の身を犠牲にしても巧を守るその姿はまさにヒロイン。

『人形』

海底に沈んでいた不気味な人形、現在ＩＳ学園の生徒に拾われて、
のほほんさんの腕の上にいる。
目を離すとポーズが変わってたりする。

「アッタヨ！」

解説？（後書き）

ＮＧ

名護さん「ＮＧ？そんなことを考えるのは今すぐに止めて世界平和のため自分が何ができるのか考えなさい。」

ご感想ご質問等は感想に書き込んでください。

30話

巧はオートバジンでラウラの援護に行く最中、箒にあった。
特になんともない出来事だが、そのときの箒の表情はまるで力に溺れている様な顔だった。
それが巧のなかでは気になっていた。

「…うぉっ！」

巧は急ブレーキをかけ道路の真ん中で止まる。
目の前に高校生くらいの少年が倒れていたからだ、オートバジンを止めると
巧は少年に声をかける。

「おい、大丈夫か？……ッ！」

途中で言葉が何も言えなくなる。
その少年の体は傷だらけで切り傷やあざだらけだった。
そしてなにより巧に衝撃をあたえたのは、その少年が『織斑一夏』だということだ。

「…ここは…」

一夏は目が覚めるとすぐに異変に気づいた。
自分が倒れていた場所は道路の真ん中、なのに今は旅館の一室の布団の中にいる。

周りを見回すとコーヒーを必死に冷ましている男がいた。
男、巧は一夏が起きたことに気づくと立ち上がりもう一つのコーヒーを差し出す。

「…あんたが助けてくれたのか？」

差し出されたコーヒーを一口飲んだ後、目の前の男に尋ねる。

「フゥーフゥー……ああ、」

コーヒーを冷ましながら目の前の男は言う。
そのとき一夏は目の前の男の近くに置いてあるベルト見て、男の声を聞き、ある人物を思い出す。

「…まさか、誘拐事件の……」

「……その怪我、どうしたんだ？」

巧は一夏の言葉に何も答えず、質問する。

「……」

一夏は何も言わず俯く、幼なじみの親友にＩＳでやられたなんて言えるはずもない。
巧も一夏の様子に何があったか察してコーヒーを飲むよう促す。
しばらく沈黙が続いた後、一夏が巧に礼を言い去っていく。
巧は冷めたコーヒーを飲むとあることに気づく。

「そういえば、あいつに俺の名前言ってなかったな…」

そして時計をチラッとみてまた呟く。

「そろそろ、帰りの支度でもするかな…」

浜辺

「何故邪魔をするか知らないが、次に邪魔したら貴様も…」

「私をどうするのだ？殺すのか？」

「……」

そこから何も言わず箒はラウラの前から去っていく、
ラウラは箒の背中を見ながらカイザフォンを懐に入れようとしたとき違和感を感じて
カイザフォンを見ると少し砂が付いていた、ラウラは手でカイザフォンに付いている砂を払うと
カイザフォンを懐にしまい旅館に戻る。

もうあたりも暗くなってきた。

ある旅行バスが何台か並んで臨海学校にいる生徒達を迎えに海沿いの道を走ってた。
一番後ろのバスが信号に引っかかり止まり、前の数台が先に行く。
ちょっとした暑さに運転手は窓を開ける、そこそこ涼しい風が吹いていた。
運転手はそれを見ながら手元にあるペットボトルを取り中に入っているお茶を飲む。
信号が青になりアクセルを踏もうとしたとき目の前にフードをかぶった男が現れる。
運転手はクラクションを鳴らすが男は何も言わずバスに近づいてくる。
フードをかぶった男の姿が変化し、キノコのような怪物になると、運転手は驚きバスを急発進させる。すれ違いざまにキノコのような怪物は頭部の笠から胞子を少量まく、胞子は窓から入り、運転手をすぐに絶命させた。

バスが止まった後フードの男はバスの中に入り運転手の服を奪い、用済みの運転手を海へ放り捨てる。

「…さてと、行くか…」

そう言うと、バスは暗闇の中へ消えていった…

３０話（後書き）

ＮＧ

「…ここは…」

一夏は目が覚めるとすぐに異変に気づいた。

自分が倒れていた場所は道路の真ん中、なのに今は謎の研究室のような所にいる。

大道「ようこそ、ＮＥＶＥＲへ、歓迎しよう。」

泉京水「何このイケメン？誰このイケメン！？」

一夏（帰りたい！）

この街に散らばる最後のＴ２メモリを取ってきてくれたら感想に書き込んでください。

31話

「みなさ～ん、忘れ物はありませんか～！もうバス来ちゃいますよ～！」

臨海学校の最終日、生徒に山田先生が言う。
巧は織斑一夏という心残りを胸に秘めながらボーッと空を見る。

しばらくしてクラス分のバスが旅館の駐車場に止まり
ＩＳ学園の生徒が自分のクラスのバスのトランクに荷物を入れる。
その間、巧はバジンに適当に荷物をくくり付けてエンジンをかけておく。
巧はヘルメットをかぶろうとすると、ラウラがバスに乗ろうとしてふらつくのが見えた、が
周りにいたやつらが手を貸していたので特に何ともないようだ、多分貧血だろう…
そう解釈し巧はオートバジンに跨り他の生徒達より先に行く。

ラウラはバスに乗る瞬間、目の前が真っ暗になり頭痛が襲った。

「……ッ！」

体がふらつき倒れそうになるが何とか持ちこたえる。
その様子に周りにいた女子が心配するが

「……なんでもない、ちょっとした貧血だ…」

と言い微笑む。その様子に周りは安心してラウラの荷物を持ってあげる。
ラウラはそのちょっとした気遣いが嬉しかった。

全員がバスに乗り、出発しＩＳ学園に向かい走っていく。
だが巧のクラスのバスだけ動かない、運転手はエンジンをかけようと何度もキーを動かすが
全く反応がない、運転手がバスから降りてバスの後部を見に行った後中に入ってきて申し訳なさそうに山田先生達に言った。

「すいません…なんかエンジンの調子が悪くて…すぐに直します！」

そう言って運転手はまたバスの後部に行く。
織斑千冬は、慌てて走っていく運転手の後ろ姿を目で追いながら山田先生に何か耳打ちした。

十分後
「いやぁーすいませんでした、では出発します！皆さんシートベルトをお付けになってください！」
陽気に運転手は言うとバスが動く、もう他のバスは見えない、だいぶおいて行かれたようだ。

バスが臨海学校を離れて数十分後、

「あの～この中に専用機持ちとかやっぱりいたりするんですか！？」

突然運転手が座席の一番後ろまで聞こえるくらいの大きな声で言う。

「ああ、私がそうだ。」

その問いに一番最初に答えたのは…箒だった、

みんなてっきりセシリアあたりが一番最初に答えるんだろうと思っていたので驚く。

「そうなんですかぁ！すごいですねぇ！」

運転手もさっきと同じように陽気な声で言う。

「……じゃあ、貰うぞテメェの専用機。」

急に運転手の口調が変わりバスが止まると

運転手は変化しトードスツールオルフェノクになり箒に近づく、周りは怯え叫ぶ。

箒はシートベルトを外して紅椿を展開しようとしたが、

シートベルトが外れなかった。

「おっと、そいつには少しばかり細工させて貰ったぜ。」

トードスツールオルフェノクはシートベルトを指差しながら言い鉄棍を箒に振り下ろそうとした瞬間

「でぃやぁぁぁぁぁッ！！」

黄色い閃光のあとカイザがトードスツールオルフェノクと組み合いながらフロントガラスを突き破る。
取っ組み合いながら地面を転がりカイザはトードスツールオルフェノクの腹を蹴り飛ばし距離をとる。

「貴様ッ、どうやって脱出を…」

「言うと思うかッ！！」

ラウラは叫び、相手との距離を詰めカイザブレイガンを振るう。

ラウラが座っていた座席には鋭く光るナイフが落ちていた。
隣の女子はそれを拾いシートベルトを切り、近くの女子のシートベルトを切っていく。

その様子をカイザはちらりと見てトードスツールオルフェノクに言う。

「どうやら、専用機はもらえないようだな。」

「……そうでもねぇぞ。」

トードスツールオルフェノクが言った後カイザの背中にまるで巨大な鉄球をぶつけられたかのような
衝撃が襲う。

地面を何度か転がり起きあがるとそこには5体のオルフェノクが立

っていた……

31話（後書き）

NGというより裏話

深夜、バスの中

「おい、そこのドライバーとってくれん？」

「ほらよ」「うわっ！お前触手でやんなよ気持ち悪りぃ…」

「ンだと！便利なんだぞこれ！」

「うるせぇ！馬鹿共いいからシートベルト改造早くやれよ！」

「あーはいはい、わかりましたよ……」

カチャカチャカチャカチャ

オルフェノク一味のシートベルトの改造は朝までかかったらしい…

ご感想ご質問があるオルフェノク様は先着四名様限定で

ラッキークローバーに入ることができるかも……

感想お待ちしております。

９１３の日特別版　もしも巧以外全員草加だったら。

タッグトーナメントから数日後。
巧はやっと怪我が治り自分の部屋でゆっくり寝ていた。
土曜日なので授業もない、疲れた体を癒す。

「…もう十時だよ、巧、早く起きないと。」

シャルル、いやシャルロットの声が聞こえ体を揺すられる。

「うるせぇなぁ…疲れてんだよ、寝かせてくれ…」

巧はそう言い布団をかぶる。

「…いけないぁ…そういう態度は。」

巧は驚いて布団から飛び起きる。
あのシャルロットの声が急に昔よく聞いていた草加の声にそっくりだったからだ。
突然の出来事に巧は何も言えなくなる。
気がついたらシャルロットの髪型も心なしか草加の様だった。

「どうしたんだ、乾？」

そのしゃべり方は完全に草加雅人そっくりだった。
巧は急いで部屋から飛び出し逃げていく。
逃げた理由はシャルロットが完全に草加になっていたからだ。
なにを言っているのかわからないだろうが巧自身も混乱していた。
あのシャルロット・デュノアが気がついたら草加雅人に変わっていたからだ。
意味が不明すぎる。

「おい！乾、廊下を走るな！」

「そうですよ、乾君あぶないですよ～」

走っている最中、山田先生達から声をかけられる。
巧は二人に事情を話そうとするが、その前に山田先生が巧を注意する。

「もう！廊下は……廊下は走っちゃいけないって言うルールが人間にはあるんだよ…まぁオルフェノクの君にはこんなことを言っても仕方ないかなぁ…」

途中で山田先生の声が草加の声に変わっていく。
巧はまた走り去っていく。

しばらく走っているとセシリアを見つける。大した変化も無いように見えたし
なにが起こっているのか声をかけようとしたがセシリアは自分の手を念入りにウェットティッシュで
拭いているのを見てまたその場から逃げる。

校舎の外に出で一度巧はベンチに座り、深呼吸する。

「キャー！！」

悲鳴が聞こえ巧はその悲鳴が聞こえた方に向かい走る。

そこには龍のようなオルフェノクがＩＳ学園の生徒を襲っていた。

巧はベルトを取り出し素早く変身コードを入力する。

「変身！」　エラー

変身できなかった、「何でだ？」と思いベルトを見るそこには使い慣れたファイズフォンではなく、カイザフォンだったから。

巧は今までの出来事についていけなくなり。手で頭をおさえる。

その隙に龍のようなオルフェノクに攻撃され吹き飛ぶ。

巧は地面を数回転がり倒れる。

体が凄く痛む、残った最後の力を振り絞り立ち上がろうとしたとき

目の前にカイザが現れ

巧の首を掴むとそのまま持ち上げて首の骨をへし折る。

「…巧、大丈夫？すごくうなされてたけど…？」

目の前にいたのはシャルロットだった。

そして今自分はベットの上にいる、つまり…

「夢オチかぁ……」

そのときの巧の表情はとても安心したような顔だった。

９１３の日特別版　もしも巧以外全員草加だったら。（後書き）

はいっ、と言うわけで今日は九月十三日、カイザの日ですのでふざけてみました。

実際たっくんは草加さんのこと嫌ってないんだよね。

ご感想ご質問おまちしております。

32話

「……チッ…」

ラウラは大きく舌打ちをする、目の前には、
象のような顔の、エレファントオルフェノク
牛のような巨大な角をもったオックスオルフェノク、
ガンマンのような風貌のバットオルフェノク、
茸のような笠をつけたトードスツールオルフェノク、
そしてサボテンのような刺々しい体の、カクタスオルフェノク。

五体のオルフェノクがいたからだ。
どのオルフェノクも武器を精製しカイザの周りを囲む。
先に目障りな自分(カイザ)を倒そうとしている。

カイザは焦らずカイザブレイガンを構えてＩＳ【シュヴァルツェア・レーゲン】を展開し立ち向かう。

巧は他のクラスのバスと共にサービスエリアでのんびりと、買ってきたお茶を飲む。
そのときファイズフォンが鳴る、セシリアからだ、巧は電話に出て話を聞くと
表情が一変し一気にお茶を飲み干し、

オートバジンに跨り一組のバスに向かい走っていった。

カイザはかなり劣勢だった。
エレファントオルフェノク突進態によってバスが何度もひっくり返され
中の生徒達は何人も気絶していて援護は絶望的だ。
それにいくらＩＳを展開してるとは言え五体がかりだとさすがに辛い。
隙を見てカイザスラッシュを放とうとするが他のオルフェノクに妨害される。
戦局は圧倒的にカイザが不利だ。
そこでラウラはまず一番厄介な相手、エレファントオルフェノクに的を絞る。
周りのオルフェノクをカイザブレイガンとカイザフォンで撃ちまくり距離をとると
素早くカイザポインターを足につけて黄色いターゲットマーカーを当てて、
エレファントオルフェノクの動きを止める。
カイザはそのターゲットマーカーに蹴りを入れようとした、そのときラウラに激しい頭痛が襲う。
あまりの痛みに思わず膝をつく、無理矢理立とうとした時
自分の手の表面が灰化しているのに気づく。ラウラの思考が一瞬ストップし動きが止まる。
その隙にエレファントオルフェノクは突進態に変わり巨大な足でカイザを蹴り飛ばす。
地面を何度か転がった後ガードレールにぶつかり変身が解除される。

地面に倒れたラウラはうめき声を上げる。その様子を見ながらエレファントオルフェノク突進態は
巨大な足で何度も踏みつける。

他のオルフェノクはその様子に呆れながらＩＳを奪うためバスに近づいていく。
ひっくり返り上下逆さまになったバスの扉を引きはがしカクタスオルフェノクが中に入っていく
そのときビームがカクタスオルフェノクに命中しバスの外に吹き飛ぶ。
バスの一番後ろの座席でブルーティアーズのライフルの銃口が熱を発していた。
吹き飛んだカクタスオルフェノクをオックスオルフェノクはケラケラと笑い馬鹿にする。
セシリアはシャルロット、箒と共に天井を突き破り外に出ると武器を構える。

シャルロットはオルフェノク達にアサルトライフルを撃ち動きを止める。
その隙にセシリアはオルフェノクの一体
トードスツールオルフェノクの頭に狙いをつけて撃とうとするがセシリアとシャルロットの脳天に銃弾が当たる、勿論シールドエネルギーがあるため大したダメージは無いが二人の背筋が凍り付く。
戦闘機並みに速いＩＳに銃弾を命中させる、しかも飛び続けているのに正確に頭部を二回続けてだ、それをやってのけたバットオルフェノクの動きは異常すぎる。

箒は刀を握りバットオルフェノクに突っ込む。
セシリアとシャルロットはバットオルフェノクを箒に任せて

ラウラを助けに向かうが他のオルフェノクがそれを阻む。

「あ！尾上君、ＩＳ学園の子がねぇ水着忘れちゃったみたいなの、まだ近くにいると思うからでコレ届けてきてくれる？」
そういってビニール袋に入った白い水着を一夏に渡す。

「……わかりました。けど俺が女性の水着持って行くってのはちょっとまずいんじゃないですか？」

「大丈夫！尾上君イケメンだから！それじゃ、いっといで！」

「理由になってません、はぁ…行ってきます。」

一夏は外に出て原付に乗り走っていった。

32話（後書き）

裏話

今回の話で圧倒的な実力を見せたバットオルフェノク。

バスのシートベルト改造の7割は彼がやったものである。

ご感想ご質問等ございましたら名護さんに相談してから伝えてください。

33話

「早くしないとラウラが…ッ」

シャルロットはオックスオルフェノクにサブマシンガンとアサルトライフルを撃ちまくるが
頑丈なオックスオルフェノクには大して効かない、
だがオックスオルフェノクは動きが遅い、パイルバンカーで狙おうとするが
トードスツールオルフェノクが横から鉄棍で殴りかかる。

セシリアはカクタスオルフェノクが飛ばす針が邪魔で思うように前に進めない。

そして箒は紅椿の刀を握りバットオルフェノクに襲いかかるが
バットオルフェノクは素早く銃を撃つと銃弾が箒の脳天、喉、心臓に二発ずつ当たる。
箒はシールドエネルギーの残量を確認し銃弾を受けながらバットオルフェノクの懐に潜り込み
斬りつける。が、その攻撃は簡単に防がれ、銃口を箒の額に押しつける。
箒は急いでブースターを噴かせ後ろにさがる。
箒の頭をよぎったのは『苦戦』なんて物じゃない。自分の『死』だった。
思わず刀を握りしめる力が強くなるのを感じる。

その様子を見たバットオルフェノクは腕を上げ、手に持っている銃を落とす。
そしてだらりと腕をおろして首を数回まわしたあと右手の人差し指をクイッと動かす。
これは挑発だとすぐに箒は理解すると叫びながらバットオルフェノクに突っ込む。

バス襲撃から何分経ったであろうか、まだ三十分も経ってないだろう。
その間に箒はバットオルフェノクの攻撃を食らいまくりシールドエネルギーの残量は僅か
シャルロットとセシリアはダメージこそ大して無いがかなり追い込まれてきている。

そして何十回目か、エレファントオルフェノクの巨大な足での踏みつけによりラウラのＩＳが
解除される。エレファントオルフェノクはそれを待っていたかのように歓喜し突進態をやめて
ゆっくりとラウラの頭を踏みつける。

「あああああああああああッッ！！」

ラウラの悲鳴がその場に響く。
シャルロット達は助けにいこうとするが他のオルフェノクに道を阻まれ攻撃される。

エレファントオルフェノクはラウラを持ち上げ両腕でラウラの頭を掴む。

「…それじゃあ、テメェの頭を潰してフィニッシュだ！」

エレファントオルフェノクは叫び足を勢いよく下ろす。

……グチャリ……

生々しい、まるで腐った林檎を握り潰したような音が響く。
だらりと力なく膝を曲げ倒れるとすぐに灰になる。

だが灰になったのはラウラではなくエレファントオルフェノクだった。
エレファントオルフェノクがさっきまで立っていた場所にいたのは衰弱したラウラを抱えたタイガーオルフェノクだった。

他のオルフェノクは自分達の仲間では無いオルフェノクの存在よりも、
エレファントオルフェノクの殺されかたに驚いていた。
武器を使わずに、背後からエレファントオルフェノクの頭を掴み握りつぶしたからだ。
なぜオルフェノクが人間を助けるのかそんな疑問が頭に浮かんだが剣を精製しこちらに近づく姿を見てすぐに消えた。
エレファントオルフェノクを殺した相手に対する憎しみはあったが

今はそれを一度忘れて
目の前のタイガーオルフェノクも倒すことに専念し襲いかかろうとしたとき
タイガーオルフェノクを含む五体のオルフェノクに弾丸の雨が当たる。
五体のオルフェノクの前に立っていたのは赤いラインに黄色い目の男に銀色のロボット
仮面ライダーファイズとオートバジンが立っていた。

３３話（後書き）

今回はＮＧが思いつかないので無し。

ご感想ご質問等ドシドシ待ってます！

３４話

「馬鹿！あいつは味方だ！！」

ファイズはタイガーオルフェノクを指差し、そう言った後オートバジンを蹴り飛ばす。

ファイズを自分達の敵とすぐさま判断しオルフェノク達は分散する。
カクタスオルフェノクはオートバジン、
オックスオルフェノクはセシリアとシャルロット、
トードスツールオルフェノクはファイズ、
そしてバットオルフェノクにはタイガーオルフェノク。

各自戦いを始めた。

オルフェノクとライダーとＩＳが入り乱れて戦う中、箒は震えながらボーッとそれを見ていた。
今まで箒が戦ったのは【福音】と【タイガーオルフェノク】だけだった。
他に比べ戦闘経験があまりにも少ない。
それに【福音】は巧が助けなかったら箒は敗北していただろうし
【タイガーオルフェノク】には戦意がなく、箒には一度も攻撃しなかった。

箒はＩＳに、紅椿に、力に溺れていた。
口には出さなかったが『自分は強い』と思いこんでいた。

第四世代ＩＳをもった唯一の存在、自分を特別な存在だと思っていた。
だがバットオルフェノクと戦っても勝てると思っていたが実際は違った。

バットオルフェノクから向けられる『殺意』
急所を狙う攻撃、シールドバリア越しに伝わる弾丸
痛くはないが自分の命綱（シールドバリア）を削っていく鋭いブーメラン

感じた格の違い、力の差。

そして箒は戦うことをやめた。
後悔は無いし、今、誰も自分を殺そうとしないということに安心していた。
だからセシリアやシャルロット、巧と…謎のオルフェノクが戦っているその姿を見ても
何も感じなかった。

チラリと紅椿の待機状態を見る。
以前はあんなにも執着し欲し、手に入れた専用機なんてもう、どうでもいい。

オートバジンの関節が動くたび駆動音が響き、前に突き出した金属の重い拳が
カクタスオルフェノクを殴るたび火花が散る。

オートバジンにカクタスオルフェノクは針を飛ばすが堅い装甲に当たるたび針の先が曲がり
地面に落ちる、今度はお返しとばかりに１６門のガトリングマズルから１２ｍｍ弾を１秒間に９６発連射する
ガトリング　をカクタスオルフェノクの全身に浴びせると
カクタスオルフェノクは全身が火花で見えなくなり道路の反対側の海に落ちる。
その後頭部のバイザーを光らせてセシリア達の援護に向かう。

「オラァッ！」

トードスツールオルフェノクは叫びながら鉄棍でファイズの腹部目掛けて勢いよく突くが
ファイズエッジで受け流され腹部に膝蹴りを食らう、トードスツールオルフェノクはよろめくが
その隙に何度も斬りつける、タイガーオルフェノクの様に剣道の動きでは無い、
まるでチンピラの様な攻撃だがトードスツールオルフェノクに反撃の隙を与えない。
何度も斬りつけトードスツールオルフェノクにヤクザキックを食らわし距離を離すと
ＥＮＴＥＲキーを押す、その瞬間腕の赤いラインが光り移動する。
その光りがファイズエッジまで行くと一振りしフォトンブラットが波のように地面を走り
トードスツールオルフェノクを宙に浮かせ行動不能にすると間合いを詰め連続で斬りつける。
その後トードスツールオルフェノクの断末魔の後青い炎と同時にΦのマークが浮き出る。

ファイズはファイズエッジのミッションメモリーを抜いたあとファイズエッジを放り捨てて
フォンブラスターを【バーストモード】にして構える。

「ぬぅぅぅぅッ！！」

オックスオルフェノクに為す術は無かった、彼は遠距離武器を持っていない。
だからブルーティアーズのビットとスナイパーライフル、ラファールのショットガンとリボルバーに
ただ体を張って耐えているしかなかったが
あんな威力のビームを何発も撃ち込んで銃身が焼きつかない訳がない。
ブルーティアーズのスナイパーライフルの攻撃が止まった瞬間、
その場を駆け出し巨大な拳で殴りかかろうとするがオートバジンのガトリング、フォンブラスターを
食らい動きが止まる。セシリアはビットからの一斉射撃、シャルロットはグレネード弾
その四つを食らいオックスオルフェノクは最後に一言残し崩れ去る。

「　　」

巧達には聞こえなかったがバットオルフェノクには聞こえたらしく
さっきまで互角だったタイガーオルフェノクを蹴り飛ばし銃を撃ち
まくると
まるでさっきとは別人の様な動きで地面に倒れたタイガーオルフェノクの上に乗り
マウントポジションをとって銃で撃ちまくりブーメランでタイガー

オルフェノクの喉元を切ろうとする

ファイズはセシリア達にバスにいる生徒を助けるように伝えて、
バットオルフェノクの背中に蹴りを入れる。
それにより脱出したタイガーオルフェノクはよろよろとファイズから離れていく、
バットオルフェノクは吹き飛び何度か地面を転がった後すぐに立ち上がり
バットオルフェノクは銃をファイズの右足を集中的に撃ちまくると
ファイズはバランスを崩し倒れる。

朦朧とした意識の中にいたラウラは自分の身体が揺すられているのを感じ意識を取り戻す。
目の前にはベルトをつけた自分の恩師の弟、織斑一夏がいた。

３４話（後書き）

ＮＧ

その四つを食らいオックスオルフェノクは最後に一言残し崩れ去る。

「フィギュアーツカイザ明日発売だから俺の分も……」

巧達には聞こえなかったがバットオルフェノクには聞こえたらしく
さっきまで互角だったタイガーオルフェノクを蹴り飛ばし銃を撃ち
まくると
まるでさっきとは別人の様な動きオモチャ屋に向かいレジの前で一
万円をにぎりしめ
言う「すいません、カイザとアマゾンください。」

明日はカイザとアマゾンの発売日！

ご感想ご質問お待ちしております。

35話

「あああああああああああああああ！！」

箒は悲鳴に似たような声で叫ぶ。

見てしまった、

タイガーオルフェノクの正体を、

今も昔も大好きな少年

いじめられていたとき、助けてくれた少年。

姉のせいで離ればなれになった少年。

行方不明と聞いていた少年。

少年、『織斑一夏』は目の前にいた。

箒にとって一夏の存在は大きすぎる。見つけたら思いっきり抱きしめたい、とまで一夏を想っていた。

だがその『織斑一夏』は人間じゃない、ただの異形の怪物（オルフェノク）だった。

異形の怪物（オルフェノク）から人の姿に戻るのを見た、見てしまった。

（…嫌だ、違う、あり得ない。）

箒は必死に今見た光景を忘れようとしていた。

「自分は何も知らない、何も見ていない、」

声に出して自分に言い聞かせようとしていた。

（一夏はオルフェノク）
その考えが浮かんだ瞬間、声を大きくしてその考えを消そうとする。
消えるわけがない。
箒は震える体を両手で押さえながら地面にうずくまる。
…全てが夢であって欲しい…
そう願いながら。

「おい！これってどうやったら変身できるんだ！教えてくれ！？」
一夏はラウラの体を揺さぶりながら必死に尋ねる。
ラウラは一夏からベルトを奪い取り自分に付ける。
その様子に一夏は驚きながらまたベルトを奪う。
「…ハァ…ハァ…返せッ、どこのどいつか分からない男にカイザギアがわたせるか…」
「だけど、そんなボロボロの体で何ができるんだよ！」
確かに一夏の言うとおりだ恐らくこの体では良くて変身できてその後灰になるか、付けた瞬間死ぬか

どちらかしかないだろう、仮に変身しても巧の足手まといになるだけだ。
だからといってこの少年にベルトを渡すわけにはいかない。
そんなことをしているうちにファイズはどんどんダメージを負っていく。

もう、自分がどうなろうとどうでもいい。

そう思いカイザフォンに変身コードを入力していき
ベルトに差し込もうとした瞬間、またラウラの手から灰がこぼれる。
感じてしまった『死』
変身するのを一瞬ためらうが大声で死の恐れをかき消すように叫ぶ。

「変し…ッ」

ラウラはカイザに変身することは無かった。
一夏の拳がラウラの腹を殴り無理矢理変身を止めたからだ。

「貴様ぁ……」

ラウラは腹を押さえながら一夏を睨む、変身コードを知らない一夏はラウラが変身する一歩前に
止める、そしてそのまま待機音がながれ続けているカイザフォンを拾いベルトを付け叫ぶ。

「…変身ッ！！」

一夏を黄色い閃光が包み【仮面ライダーカイザ】へ姿を変える。
カイザは手を開いたり閉じたりして感覚を確かめる。
一夏は調子に乗っているとき手を開いたり閉じたりする癖があった

がオルフェノクになってからは
この癖は調子に乗っているのではなく本気で戦うときの癖に変わっていた。
チラリとラウラの方を向いて

「悪い、後で返す。」

とだけ言ってバットオルフェノクへ向かい走っていった。

バットオルフェノクの銃撃を受けて足をおさえるファイズの腹を蹴り、転がした後
バットオルフェノクは銃をファイズの頭に向ける、ファイズは間一髪横に転がり避ける。
さっきクリムゾンスマッシュを放とうとしたが足のダメージによりジャンプできなかった
それよりまず足を動かすたびに強烈に痛む。かなりピンチだがファイズの頭が撃たれる直前
カイザが走ってきてバットオルフェノクを蹴り飛ばす。
バットオルフェノクはよろめいた後すぐ体制を立て直し銃を撃つが全てカイザブレイガンによって防がれる、一夏はバットオルフェノクがどこを狙うのかを見てきた。
ほぼ心臓、喉、脳天の三カ所だった、防いだあとすぐに懐に潜り込みカイザブレイガンで斬りつける。

一夏のカイザブレイガンの持ち方は草加やラウラ達とは違う、木場のような持ち方だった。

「うぉぉぉぉっ！」

剣道のような動きでバットオルフェノクの銃を弾き、胴を切り裂く、バットオルフェノクは切り裂かれた横っ腹を両手でおさえるが傷口から青い炎が漏れ出す、最後にカイザはベルトのＥＮＴＥＲキーを押すと黄色い光がカイザブレイガンまでいき必殺の【カイザスマッシュ】で突きぬける。

バットオルフェノクは全身を青い炎に包まれながらも銃を精製しカイザに向ける。
引き金を引こうとしたときバットオルフェノクの腕が灰になり地面に落ちる。

「……お前もいつか……人を……」

サラサラとバットオルフェノクは最後に何か言い残し灰になり、風に流され消えていった。
カイザの紫色の目は消えていく灰を黙って見つめていた。

そこには敵を倒したと言う喜びはなく、波の音と虚しさだけしか残っていなかった。

35話（後書き）

NG

引き金を引こうとしたときバットオルフェノクの腕が灰になり地面に落ちる。

「……フィギュアーツカイザ……買えなかった……」

サラサラとバットオルフェノクの一万円は風に流され消えていった。

ご感想ご質問等お待ちしております。（私は買えました）

36話

一夏は変身を解除し、ベルトを地面に置くと何も言わずその場から離れる。
巧は、背中を向けて決してこちらを振り向かない一夏に語りかける。
「おい、…いいのか？」

「……この姿じゃあ千冬姉には会えないさ…それに…」

そこからは一夏は何も言わずさっきの戦いで壊れた原付を放置して去ろうとした。

「待て！……一夏！！…」

一夏が旅館に戻ろうとしたときバスの方向から織斑千冬がポタポタと血を流す
腕をおさえながら問いかける。

セシリアとシャルロットがバスの中の生徒を助けようと中に入ると
そこには窓ガラスが背中に刺さりまくり
左腕が深く切れているのに生徒の手当をしている織斑千冬がいた。
セシリア達は手当ができた生徒をバスの中から出す。
織斑千冬も出てくるとコンクリートが削られた跡、穴だらけになった地面を見る
そしてカイザの変身解除をした『織斑一夏』がいた。
見間違えるはずもない、自分のたった一人の家族なのだから
思わず涙がこぼれてくる、近づこうとした瞬間一夏はその場を去ろうとする。
また目の前から去っていこうとする一夏を大声で呼び止める。

一夏は震えた、感動、幸福、安らぎ、そして恐怖で。
呼び止めてくれたのは自分のたった一人の家族なのだから
思わず涙がこぼれてきそうになるがそれを堪える。

今の自分は怪物(オルフェノク)だ、このことがもし一番大切な人が知ったら…
…怖い…
自分を軽蔑し、恐れるだろう、自分の正体が知られたら一夏は
生きる価値を無くしてしまうだろう。

オルフェノクになって一夏は強くなったが自分の心までは強くならなかった。
大切な人たちから離れて色々な所を転々とした、そのときも何度かオルフェノクと戦った。

そこでできた新たな大切な人達を助けるため目の前でオルフェノクになったとき
相手を倒した後、ふとその人達を見るとみんな一夏に怯えていた。
自分を化け物と罵るのもいれば、一夏を見ると泣き叫び走り去っていく人も居た。

一夏は人に怯えた目を向けられるたび心が折れそうになった。
何度も自殺しようとしたがオルフェノクだから何百メートルの高さから落ちても死ねない。

一夏の精神はボロボロだ、だからもし千冬に拒絶でもされたら一夏は完全に……

「化け物がッ！！一夏の真似をするなッ！！」

突然箒の叫び声が周りに響き、紅椿を展開し刀を一夏に向けて突く
刀があたり吹き飛び地面に落ちる、その姿はタイガーオルフェノクに変わっていた。
人間の姿じゃあ死んでしまうからオルフェノクの姿に本能的に変わったのか、
真相は分からないがオルフェノクの姿を千冬に見られ、箒が自分を殺そうとした
ということは事実だった。
千冬の驚いた目、箒の怒りや憎しみや様々な感情を抱いた目は一夏の心を粉々に砕いた。

「…やめろ、やめてくれ…そんな目で俺を見ないでくれよ……」

タイガーオルフェノクの全身は震え、首を横に振りながら何度も呟く。
箒が紅椿で襲いかかろうとした瞬間、
「…ぅうぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」
叫びながら反対側の浜辺に走る。
タイガーオルフェノクを殺そうと箒は追いかけようとしたが巧が立ちふさがる。
その巧の目の中には静かな怒りが籠もっていた。

「うぁぁっぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

まるで泣きじゃくる子供のようにタイガーオルフェノクは少しでもバスから
離れようと走る。
…わかっていた、わかっていたのにあの二人の目が怖くて怖くて仕方がなかった。
オルフェノクは絶対こんなふうな扱いなんだろうと知っていたのに胸が痛くて痛くて仕方ない。
こんなに苦しくて痛いのならもう人の心なんて…

「待て、一夏」

後ろから声が聞こえた、走るのをやめ振り返る。
そこにはたった一人の家族の織斑千冬がいた
タイガーオルフェノクは剣を精製し構えながらゆっくりと千冬に近

づく
そしてその剣を振りかぶり……下ろせなかった。
手から剣が落ち一歩、また一歩と後ずさりする。
自分のしようとしたことを思い出すと手が震える。
いままで大切にしてきた人間の心を捨ててしまうところだった。
千冬は自分より大きいタイガーオルフェノクを抱きしめる。
安らぎを感じタイガーオルフェノクの目頭が熱くなる。

「いいか、お前の姿形が変わっても、一夏お前は私のたった一人の家族だ。」

とても優しい声だった。
タイガーオルフェノクの目からポツリ、ポツリと涙がこぼれ一夏の姿に戻る。

一夏はしばらく自分の姉の胸で泣き続けた。

３６話（後書き）

今回はＮＧは無しです。
ご感想ご質問お待ちしております。

37話

「…そこをどけぇ！乾ィ！！」

紅椿の刀を構えながら箒は叫ぶ。

「……」

だがファイズは何も言わずそこから動かない。
仮面に隠されて巧の表情はわからない。

「奴は一夏のフリをしたただのオルフェノクだ！」

「……」

ファイズはは何も言わない、ただ黙って箒を通さないだけ。

「…貴様がオルフェノクを見逃すと言うのなら私が奴をッ！！」

箒がそう言いって浜辺に向かおうとしたとき腹にＩＳ越しに衝撃が襲う。
ファイズが箒を殴っていた。

箒は巧が人間を守ると言っていたのに人である自分を殴ったことに違和感を感じたが
すぐに切りかえて目の前のファイズを倒そうと刀を構える。

……殴ってしまった……
が、不思議と木場との人間を守るという約束を破った気はしなかった。
今ここで自分が箒を止めなければ人の心を持った一夏を死なせることになり
箒自身も人を捨ててしまうだろう。
巧がとった行動は人を守るため人を傷つけるという矛盾したものだった。
バットオルフェノクに撃たれた足の痛みは今は感じない。
自分が怪物（オルフェノク）だからなのか、わからない。

とてもスペック的にも体力的にもファイズは紅椿には勝てない……
はずだった。
圧倒、必殺技もつかっていないただのパンチ、ただのキックで紅椿を圧倒していた。
箒はいくら刀を振ってもあたらない相手に、自分を圧倒する相手に怯えてきた。
もうボロボロのはずなのに、どこにこんな力が残っているのかわからない。
当然シャルロットやセシリア、一組の生徒が二人の争いを止めようと呼びかけるが

巧はそれを無視する。
ファイズの5トンのキックが紅椿に炸裂するとシールドエネルギーが尽きたのか
箒はガードレールに衝突する、金属のガードレールが冷たい。

「…頭冷やせ。」

それだけファイズは言うと変身を解除しバスの近くに止めてあるオートバジンに近づく。
バスに近づくと周りが質問してくる。
「なんで、篠ノ之さんと喧嘩してたの？」
「あの姿は何？」
巧はそれを無視しオートバジンに積んである。水筒を取り出し水を口に運ぶ
渇いた喉が潤っていくのを感じる。

「…乾さんなんで篠ノ之さんを…」

「なにか理由があったんだよね？」

セシリアとシャルロットが理由を聞こうと話しかけてくる。
巧は水を飲み干した後二人を睨みながら言う。

「…俺はあいつが気にくわねぇんだよ…四世代をもらってからずっと…」

セシリア達は驚く、何か理由があったと思っていたのに
ただ気にくわないから、妬んでいたという理由に…
みんなの中の乾巧が変わっていく。

「…巧…笑えないよ…その冗談…」

シャルロットが小さい声で言う。

巧は大声で最後に言い放つ。

「そうだよ！俺はあいつが気にくわねぇ！！文句あっか！！」

パチンッ

叫んだ後、巧の頬がセシリアに叩かれる。

目に涙をためながらセシリアは静かに、だけど力強く言う。

「…見損ないましたわ。乾巧！」

巧は何も言わない。

その後一夏と共に千冬が戻ってきて全員で一度、臨海学校に戻った。

明日になればバスが迎えに来るらしい。

巧は自分の部屋に着き布団に倒れ込むと全身が痛む。

無理もない、この臨海学校での三日間ずっと戦っていたのだから。

そして睡魔が近づき巧は痛みが薄れてきて眠りにつく。

「畜生、畜生、畜生…」

全身の痛みを我慢しながらカクタスオルフェノクは誰もいない浜辺を足を引きずりながら
歩く、自分だけ生き残ってしまった。バットオルフェノクがピンチのとき出でいけなかった
自分の臆病さ、仲間の死、ＩＳやライダーに対する怒りがグルグルと頭の中で渦巻く。

そのとき背後から近づく存在にカクタスオルフェノクは気づかなかった。
後頭部を殴られ気を失う、地面に倒れたカクタスオルフェノクをヒョイと掴むと
海老のようなオルフェノクは海に入っていく。

「…もうすぐ、もうすぐよ、王が復活するのは…」

そう言って海老のような、ロブスターオルフェノクは真夜中の海に消えていった。

37話（後書き）

NG
草加バージョン

「…草加さんなんで篠ノ之さんを…」
「なにか理由があったんだよね？」

セシリアとシャルロットが理由を聞こうと話しかけてくる。
草加は水を飲み干した後二人に言う。

「わからない、話しかけようとしたら急に…」
「でも傷つけたのは事実だ……すまない。」

たっくんもここまでじゃなくて良いから素直でも良いと思うんだ。

ご感想ご質問お待ちしております。

38話

臨海学校のバス襲撃事件から一ヶ月が経った。

ＩＳ学園の警備も以前と比べ強化されていった。
一夏は事件のあと保護のため、ＩＳを扱える第二の男という形でＩＳ学園に入学、
完成次第専用機が用意されるという特別待遇となった、が
箒とはいまだに溝があるらしい。

そしてオルフェノクの記号を埋め込まれていたラウラは変身をするごとに
肉体を蝕んでいくことが判明しカイザギアは一夏に渡された。

ファイズとカイザの正体を知っているのは今のところ
一年一組の生徒数人、ＩＳ学園教師、箒、セシリア、鈴、シャルロット、ラウラのみである。
だが二人の正体がオルフェノクと知っているのは
千冬、箒、セシリア、シャルロット、ラウラだけ、鈴は二組だからいない。

オルフェノクがＩＳ学園にきた場合カイザとファイズで早急に潰す。
スマートブレイン社とＩＳ学園が協力しこのことは外部には漏れていない。

土曜日、巧はスマートブレイン社に足を運んだ。
話したいことがあると木場に言い、社長室に入る。

「……ＩＳ学園に来るオルフェノクが多すぎる。」

そう、オルフェノクが多い。
おかしい、まるでオルフェノクはＩＳに乗れるというのを知っているようだ。
過激派のオルフェノク達は組織など無い、何故知っているのか、何故情報が知れ渡っている。
バスを襲撃したオルフェノクはＩＳを狙っていた。

これは過激派達も組織が生まれてきたのかもしれない。
もしそうだとしたら過激派はより力を増すだろう。

木場に調べて貰うよう頼み巧は社長室を出て行こうとしたとき声をかけられる。

「乾君、学校はどうだい？」

巧は振り返らずに適当に返す。

「まぁ…そこそこだ…」

それだけ言うと社長室から出る。

巧は臨海学校の後、周りから一歩距離を置かれている。
箒を殴り倒したからだ。
だが巧は気にしない、以前からこれによく似た出来事が何度もあったから。

オートバジンに乗りエンジンを掛けてＩＳ学園に戻っていく。

北アメリカ大陸北西部第十六国防戦略拠点、通称『地図に無い基地』
金属で作られた廊下をロブスターオルフェノク悠々と歩く。
銃声が絶え間なく鳴り続けロブスターオルフェノクの体に当たるが傷一つつけられない。
屈強な兵士達の前でレイピアを構え振る、屈強な兵士の体が三等分にされる。
それを続けながら目的の物が存在する場所まで歩く。

あっという間だった、かつて兵士達がいた金属の廊下には血と肉片の臭いが充満し悪臭を放つ
ロブスターオルフェノクはそのまま歩くと目的の物に近づく
その廊下の角を曲がった瞬間、光の矢がロブスターオルフェノクの腹に刺さり爆ぜる。

「あの子はわたさないッ！」

そう叫びながらもＩＳ用の武器でロブスターオルフェノクを撃ち続ける。

「……」

ロブスターオルフェノクはただ黙って攻撃を避け前に進む。

目の前にロブスターオルフェノクの拳が見えた瞬間女性の意識は途絶えた。

ロブスターオルフェノクは分厚い扉を切り裂き中にあるＩＳ『福音』のコアを奪い

血で黒ずんだ廊下を歩きながら去っていった。

３８話（後書き）

ご感想ご質問お待ちしております。

39話

『アメリカ軍基地に謎のＩＳ襲撃、被害甚大。』

男はうす暗い部屋で新聞を読んでいて下の方の隅っこにある記事を見て笑う。

「…何が謎のＩＳだよ、嘘つきやがってさぁ。」

男は新聞をクシャクシャに丸めてその辺に放り捨てる。

「ＩＳも使用していない謎の存在にやられたなんて言いたくないのよ。」

後ろからシャンパンを持ちながらロブスターオルフェノクが現れ言う。

グラスにシャンパンを注ぐとそっと男に渡す。

「…全員集まったかしら？」

そうロブスターオルフェノクが言った瞬間、真っ先に近くにいた他の男が言う。

「はい！全員そろってますよ！姉さん！！」

「…そう、ありがとね卓也君。」

ロブスターオルフェノクが言うと卓也と呼ばれる男の顔が赤くなる。

全員、そのうす暗い部屋には6～8人もの男が居る。

…過激派のオルフェノクだ…

ロブスターオルフェノクはそこにいる男達に合図しこちらの部屋にくるよう指示する。

部屋に入ったとき男達は驚く、そこには自分達と同じオルフェノクが水槽に浸かっていたから

「…これこそ私達に必要な存在、王…アークオルフェノクよ…」

周りの男達がざわめく、それを無視しながら淡々とロブスターオルフェノクは続ける。

「でも、王は凄まじい戦いで永い眠りについているの……」

「……だから貴方達を生け贄にさせて貰うわ。」

その瞬間、王がよろりと起き上がり、男の首を掴むと頭から食らう。

そう石化させてオルフェノクを食べているのだ。

何人ものオルフェノクの悲鳴、断末魔その音がロブスターオルフェノクは心地よくてたまらない。

悲鳴がしばらくの間続き、最後の一人を食べた瞬間何も聞こえなくなる。

王は千鳥足でロブスターオルフェノクの方へ歩くとＩＳ『福音』の待機状態を見つめる。
ロブスターオルフェノクはＩＳになぜ王が興味を抱くのか疑問を感じながら
王に『福音』を渡す。しばらく王は自分の手のひらでまじまじと見た後
コアを取り出し自分の口に放り込むと不完全な王の体が光る。

そこでロブスターオルフェノクは気づいた、ＩＳは高カロリーな王の食事になると。
本来は自分が使おうとしていたが王が食するのなら自分用など必要ない。
ロブスターオルフェノクはまだ回復しきっていない王を水槽に戻すと部屋を出て行き姿を消した。

「でさぁーそこの喫茶店のカレーがおいしくて…」

「え、どんな店？」

「確かポレポレ……」

ＩＳ学園の第二アリーナの近くで話していた生徒の顔が凍り付く。
もう片方の女子はまだ気づいてないらしい、後ろにレイピアをもっ

た怪物が居るのに

一夏は鈴達と話していたがカイザフォンが鳴った瞬間表情が変わり、走る。

「ちょっと！！一夏ァ！」

鈴が叫んでいたがそれどころじゃない。
巧は福音戦で壊れた５５５が直ったらしく取りに行っているらしい
今戦えるのは一夏一人。
自分の貰ったＩＳ『白式』を部分展開し位置を探る。
すぐに場所がわかり第二アリーナまでＩＳを完全に展開し飛ぶ。

第二アリーナの外に着いたときそこにはレイピアをもった海老のようなオルフェノクと灰
何が起こったのかわかる。目の前の敵が誰かを殺したのだ。
怒りで自分の拳に力が入る。カイザフォンに素早く番号を入力し叫ぶ。

「変身！！」

その瞬間、黄色い閃光と共に一夏の姿が仮面ライダーカイザへと変わる。
一瞬ロブスターオルフェノクは驚いたような動きをとるが
すぐにカイザのパンチをくらい吹き飛ぶ。
ＩＳを展開しているカイザは圧倒的だった。しばらく攻撃した後グランインパクトを決める。

マークが空中に刻まれる。一夏は勝ったと思いＩＳを解除する。

だがロブスターオルフェノクは死んでいなかった。
一夏は知らないがロブスターオルフェノクは王に永遠の命を授かっている。
だから、殺せない。
唖然としていたカイザの胸をレイピアで何度か突く。
胸から火花を散らしカイザギアが外れ、一夏は地面に叩きつけられる。
ロブスターオルフェノクがベルトを拾い上げ番号を入力し変身する。
一夏は迫り来るカイザと戦うため周りに人がいないのを確認し
タイガーオルフェノクへと姿を変える。

鈴は一夏がカイザになって戦っているということを知っている。
一夏が走っていった後すぐに鈴も追いかける。

第二アリーナに来るとトラのような怪物とカイザが戦っているのが見える。
鈴はＩＳを展開し衝撃砲をトラのような怪物、タイガーオルフェノクに向けて撃つ
タイガーオルフェノクは何とか避けたが足下に当たり轟音が学園中に響く。
紙くずのように吹き飛ばされ地面を転がるタイガーオルフェノクはすぐに立ち上がる。

「大丈夫？一夏！？」

鈴はカイザの横に立ち言うカイザは何も言わずこくりと頷きカイザスマッシュの準備をする。
ミッションメモリーをカイザブレイガンに差し込み、コッキングレ

バーを引き
ＥＮＴＥＲキーを押し構えをとる。
鈴が青竜刀をで斬りかかろうとタイガーオルフェノクの目の前まで距離を詰める。
そのときカイザブレイガンから発射された黄色い光線が鈴を拘束する。
突然のことに鈴の頭はついていけず混乱する。
カイザが距離を詰め切り裂こうとしたとき、
白銀のバイクがカイザをはねとばす、カイザは宙に浮き地面に落ちる。
その間にミッションメモリーをカイザポインターに入れる。

「おい、大丈夫か……うぐっ！！」

オートバジンにのったファイズの背中に黄色い円錐が突き刺さり動きを止める。
ファイズは避けようとしたが間に合わなかった。
ファイズの目の前にＸのマークが浮き出る。
灰にこそならなかったが変身が解除され地面に倒れる。

その光景を見た瞬間一夏の中の何かが崩れた。

３９話（後書き）

冒頭新聞を読んでいた男はみんな大好き、カクタスオルフェノクさんです。
卓也君はＤＣＤのセンチピードオルフェノクです。ゲスト的な。
過激派のオルフェノクはこのあとスタッフ（王）がおいしくいただきました。

ご感想ご質問等お待ちしております。

40話

獣のような叫びをあげ、一夏の姿がタイガーオルフェノクへ変わりカイザの首を掴み、握りつぶしながらコンクリートの地面が砕け散る勢いで叩きつけ、馬乗りになる。
完全にマウントポジションをとったタイガーオルフェノクはカイザの顔を何度も殴りつける。
カイザはタイガーオルフェノクをどかそうと手足を動かしタイガーオルフェノクを攻撃する
だけどいくらパンチをしてもタイガーオルフェノクは全く動じない。
カイザはベルトのカイザフォンを変形させ腹部を連続して撃つ。

やっとタイガーオルフェノクから離れたカイザは変身を解除しベルトを投げ捨て、
ロブスターオルフェノクの姿に戻る。

レイピアを精製し構えるとタイガーオルフェノクも剣を精製し構える。
睨み合いなど無かった、タイガーオルフェノクが距離を一気に詰め剣を振るう。
その動きは以前のような剣道の構えなど無く、力任せで暴力的だ。
そんな動きで振るう剣は避けられ肩をレイピアで突かれる。
ロブスターオルフェノクがレイピアを抜こうとしたとき腕を掴まれる。
次の瞬間にはロブスターオルフェノクの腹に剣が刺さって貫通していた。

タイガーオルフェノクはもう一本剣を精製し左胸に突き刺す、
自分の肩に刺さったレイピアを抜きロブスターオルフェノクの右胸に刺す。

圧倒的だったと鈴は見ていて感じた。
一夏がタイガーオルフェノクになるところを見ていたが信じられなかった。
だってタイガーオルフェノクの動きは人の理性を感じさせない。
獣のようだ。

ロブスターオルフェノクは不死身だが痛みは存在する。
体中に剣を刺されれば平気でいられるはずもない。

タイガーオルフェノクがまた剣を精製し
ロブスターオルフェノクの首元を掴み切り裂こうとするがロブスターオルフェノクが精製した
レイピアがタイガーオルフェノクの腕についているガントレット、
待機状態『白式』を斬りつけると白式は地面に転がる。
ロブスターオルフェノクはタイガーオルフェノクの腹に蹴りを入れ
白式を奪い海へ走っていった。
当然そんなロブスターオルフェノクを逃がすわけが無く。
タイガーオルフェノクは精製した剣を投げつける。
銃弾より速く飛んでいった剣はロブスターオルフェノクの背中を突き抜けたが
倒れることもなくそのまま海に逃げていった。

しばらくしてから一夏の姿に戻る。

一度レイピアで突かれたからだろうか白いシャツの一部が血で黒ずんでいる。
その血は今も広がりシャツを赤黒く染めている、なのに痛みは感じない。

鈴の方は見ない、見てしまうとまた心が折れそうになるから
倒れている巧に寄ると意識は無く心拍も不安定だ。
急いで病院…違う、ただの病院じゃあいけない、スマートブレイン社に連絡を取ろうと
カイザフォンで電話をかける。

鈴は一夏の対応に違和感を感じた。
普通だったら心配し声をあげたり、感情的になっても良いはずだ。
なのに淡々と対応している。
仲間が傷つき、自分の専用機を奪われたのに…

カイザフォンで電話をかけた後、一夏は巧を抱きかかえその場を去っていく。
そこに残されたのは鈴一人だった。

スマートブレイン社の方々に巧を預け、自分の部屋に戻っていこうとしたが
鈴が一夏の目の前に立つ。

「……一夏、なんか変じゃない？何でそんな冷静なのよ。」

「…お前こそあの姿（タイガーオルフェノク）を見てよく平気だな。」

一夏の発言に鈴は少しの間何も言えなくなる。
平気なわけがない、怖いに決まっている。

「……」

「悪い、俺は眠いんだ…話ならまた今度聞くから。」

そう言って少し笑って去っていく。

一夏は自分の部屋に入って鍵をかける。
するとずるずると倒れ込み震える。さっきのロブスターオルフェノクとの戦い、
あのとき自分は人の心を失ってしまった気がする。
あのときロブスターオルフェノクが鈴にカイザスマッシュを叩き込もうとしたとき
巧の助けが無くてもタイガーオルフェノクになれば鈴を守れた。
なのにタイガーオルフェノクにならなかったのは……
見られたくなかったからだ、自分のもう一つの姿を。
自分の身を、立場を守ろうとして巧が傷ついた。
あの怒りはロブスターオルフェノクにじゃない
自分自身にだ…それで一度人の心を失ってしまった。
深い悲しみの渦にいる一夏だがその悲しみの渦は止まらない。
震える自分の手から灰がこぼれる。何度もカイザに殴られたからだ。

自分のせいで人が傷つき、自分の姿で人を怯えさせ、自分の命が消えていく。

涙をこぼしながら一夏は眠りにつく。

「ハァ、ハァ、ああ王これを…」

ロブスターオルフェノクはそう言って白式を渡す。
王は白式を食べるが完全復活にはまだ少し足りない。
だが今のロブスターオルフェノクはダメージが大きすぎる。
とても王の食材（オルフェノク）など持ってこれない。

「…なら私をあなたの血肉にして…」

そう言って王に近づく、王はゆっくりとロブスターオルフェノクを
掴み食する。
王の体が光りを放ち、王、アークオルフェノクは完全復活を遂げた。

４０話（後書き）

ＮＧ

「ＩＳなんて変な物二つも食うんじゃなかった……」

王はトイレの中でそう呟き完全復活を遂げた。

ご感想ご質問お待ちしております。

41話

スマートブレイン社

医療機器が部屋の半分近くを占領し、その医療機器に囲まれながら乾巧は眠っていた。
部屋の外では数人のＩＳ学園の専用機持ちが心配していた。

セシリアやシャルロット達は箒から全て聞いた。
巧は箒の立場を守るため嘘を吐いた、周りに嫌われようとも何も言い訳を言わなかった。
その話を聞いたとたんセシリアの目から涙がこぼれてくる。
あのとき自分のとった行動を悔いた。今すぐに謝りたいけどそれができない悔しさがあった。

「…一夏君、君の白式の替わりにはならないかもしれないが第二世代ＩＳ打鉄にフォトンブラットを倍増することのできる機能を付けた、だからこれでしばらくは戦ってくれ。」

「…ありがとうございます。木場さん」

渡されたのは第二世代ＩＳ打鉄、白式に比べて性能は劣るが今は仕方がない。
戦える手段や手数は多い方が良い。

「…すまない…一夏君……」

急に木場さんが俯き謝り出す、その目には涙が籠もっていた。

「君達の様な子供に戦わせるなんて大人として…人として失格だ……」

以前巧から聞いたことがある、木場さんはスマートブレイン社を立ち上げる前から
一人で過激派と戦ってきた、その古傷でオルフェノク態になると全身に激痛が走り、
肉体の崩壊を早めるという。それでも巧が来るまで戦い続けたらしい。
そんな木場さんを俺は尊敬している。

「木場さん大丈夫です。こういう力を持ったら誰かがやらないといけないことですし…」

それでも謝り続ける木場さんを見て胸が痛くなる。
胸が痛いってことはまだ人の心を失っていないってことだ、まだ戦

える。

一夏の表情に箒は何か引っかかりを感じた、どうした？大丈夫か？
と今すぐ聞いてやりたい
けどできなかった。謝り許して貰ったのに…
今の一夏は何か怖かった。

「ちょっと篠ノ之、ついてきなさい、話があるの…」

鈴に呼び出されて箒は何も言わずついていく、

「篠ノ之…どうして一夏に協力しないのよ！」

「……下手に手を出したら、どうなるかはお前も知っているだろう
…」

鈴は今回一夏を助けようとしてタイガーオルフェノクを攻撃し足手
まといになった…
箒はオルフェノクを倒そうとして一夏を殺すところだった。

第一この鈴の話自体できるわけがない、オルフェノクとの戦いは極
秘中の極秘だ
協力なんて許されない。

鈴は混乱し苛立っていた。

自分の好きな人が怪物で、自分のせいで巧が傷ついて……
この話自体鈴の八つ当たりだった。
鈴は歯を食いしばり、何も言わず去っていく。

しばらくして一夏達は木場に礼を言ってスマートブレイン社をでてＩＳ学園に戻る。
一夏は自分の手を握り力を込める。

もう自分の身などどうでもいい。みんなを守れたら

アークオルフェノクはロブスターオルフェノクを自分の血肉にしたとき感じた。
ロブスターオルフェノクをここまで傷つけたのはタイガーオルフェノクだと言うこと
そしてどこにいるのかもわかった。ＩＳ学園だ。
アークオルフェノクの背中のマフラーが風になびきバタバタと音を立てる

地面を蹴り空へ跳ぶ、そしてそのまま空を飛んでＩＳ学園に向かう。

４１話（後書き）

ＮＧ
地面を蹴り空へ跳ぶ、そしてそのまま空を飛んでＩＳ学園に向かう。

王「あ、部屋の電気切ったっけ？」

電気は大切にね！

マジでつけっぱなしはやめよう。
ご感想ご質問等お待ちしております。

42話

ＩＳ学園に一夏達が戻ってから2時間後、

ＩＳ学園正面ゲートから一体のオルフェノクが入ってきた。
最も警備が厳重で、ＩＳを装備した教師達もいるのにそれらを全て蹴散らして
堂々とＩＳ学園に進入する。

完全復活を遂げた王、アークオルフェノクは近づく敵を全て一掃し、進む。

ＩＳ学園の警報が鳴り続け、教師達がＩＳを装備し生徒をＩＳ学園から避難させる。
逃げまどう生徒の中をかきわけ一夏は進む、迫り来るアークオルフェノクへ走る。

「うぉぉぉぉぉ変身ッ！」

黄色い閃光に全身が包まれながらもＩＳを展開する。
そこにはＩＳを展開した仮面ライダーカイザが王の前に立つ

王と対峙して一夏は気づく。
格が違う。
今までオルフェノクと戦っていたときも敵は自分より弱いと感じることも
自分より強いと感じることもあったが今は違う、
今自分が感じるのは目の前のアークオルフェノクの相手にもならないと言うこと
ＩＳを装備しカイザギアも使っていても勝てない。
そう断言できる。
目の前のアークオルフェノクは構えすらとらない。
一夏の全身から嫌な汗が噴き出る。

「……ぅ…うぉぉぉぉぉぉッ！！」

自分の中の恐怖心をかき消すように大声を出しながらカイザブレイガンで王を斬りつける
がカイザブレイガンの刀身は王の頑丈な体に弾かれ、かすり傷一つ付いてない。
何度も、何度も斬りつけるが火花が散るだけ。王は避けようとも防ごうともしない。
ただ黙って突っ立っている。まるで一夏に「お前の攻撃は通用しない」と言っているように…

「クソッ！クソッ！！クソッッ！！！」

何度も斬りつけながらカイザは言う。

全力の力で斬っているのに傷一つ付かない王に対し段々と恐怖心が増していく
でもその恐怖心に負けないよう王を罵り、叫びながら斬りつける。
段々と食い下がらないカイザに飽きてきたのか王はカイザに右手を突き出す。

そう突き出すだけ、殴るじゃない
勢いよく突き出された右手はカイザの胸部に当たり後ろへ倒れる。
打鉄のシールドエネルギーはＩＳの大型グレネード直撃並に減り
カイザの胸の装甲は王の拳の形にへこんでいた。
当然中の一夏にダメージが伝わっていないはずがない。
まるで肺を直に潰されたような痛みを感じるがすぐに立ち上がり距離をとって
カイザブレイガンとカイザフォンをガンモードにして王を何度も撃つ
煙で王の姿が見えなくなるが大体の位置の見当はつく、そこを撃ち続ける。

だが急に煙の中から光弾が飛び出てカイザに当たる。
ＩＳのシールドエネルギーは尽き、打鉄が展開できなくなり。ベルトが外れる。
指を動かずだけでも激痛が走り、立つことさえ苦しい。
アークオルフェノクは戦う術をなくした一夏に興味を失ったように進んでいく。

アークオルフェノクが歩いていく方向は生徒達が避難している方向だ
絶対に行かせてはならない。一夏は無理矢理体を動かし立ち上がり
叫んで王の注意を引きつける
そしてタイガーオルフェノクに変化し剣を精製すると王に突っ込む。
アークオルフェノクは剣をもって迫り来るタイガーオルフェノクを
校舎側に蹴り飛ばす。

まるでサッカーボールのようにタイガーオルフェノクは吹き飛び、
ガラスの窓を突き破りコンクリートの壁を粉々にし教室に入ったところで止まる。
タイガーオルフェノクの姿は元の一夏の姿に戻り力なく地面に横たわる。
いくら体を動かそうとしても全く動かない。

（…情けねぇなぁ俺……）

一夏の目から涙がこぼれる。結局誰も守れないまま死んでいくのか、そう思い。
自分の手を見る、灰がこぼれ寿命が短いことを知らせる。

でも今は自分の寿命なんてどうでもいい、今はただ誰も守れず死にたくない。
もう一度全身に力を込めて立ち上がると教室から出て行き地面に落ちたカイザギアを拾う。
アークオルフェノクはだいぶ先に進んでいる。
変身しようとカイザフォンをベルトに差し込もうとするが
目の前がぼやけてうまく差し込めない。
それどころかカイザフォンを地面に落としてしまう
取ろうとした瞬間気がついたら地面に倒れていた。自分でも限界だと言うことがわかる。
でも戦わない理由にはならない。
カイザフォンに手を伸ばそうとしたとき誰かが自分の手を掴む。
あったかい、人の温もりを感じる。顔を上げるとそこには箒が居た。

「…箒？…なんでこんな所にいるんだ？…早く逃げないと死んじまうぜ…」

「もういい……もういい一夏…お前一人で戦わなくても…私が居る…私達がいるから…」

「？…なに言ってんだよ…お前が死んだら悲しいだろうが…」

「私はもうお前がそんな傷つく姿は見たくない！！」

それまで泣きそうな顔で静かに話していた箒が怒鳴り声を上げる。

「……そうだよな…傷つかないようにもっと強くならなくちゃな……」

「違う！！もう一人で戦わなくていい！私達を頼ってくれ！」

その箒の言葉が嬉しかった、けど一夏は箒達が傷ついてほしくない。頼ってしまったら楽になる。それでも戦ってほしくない。だから今ここに箒が来てくれてそんなふうに思っていると言う気持ちで十分だ。

カイザフォンを持ち立ち上がる、体の痛みは大して感じない。

変身コードを入力しベルトに差し込む。

「ありがとな、箒」

そう言った後一夏は微笑む。

そして黄色い閃光に包まれ再び仮面ライダーカイザに姿が変わる。

仮面の上からじゃあ、もう一夏の表情はわからない。

拳を握りアークオルフェノクへ走って行く。

「……」

巧が目を覚ますとそこはスマートブレイン社の医療室だった。
ウルフオルフェノクの超聴力で何が起こっているのか確認すると横に置いてあった
ファイズギアを掴み、ベットを飛び出し屋上に向かい走る。
走っている最中、自分の手から灰がこぼれる。カイザの攻撃を食らったからだろう。
だけど一度死んだ身、そんなことはどうでもいい。
屋上でファイズに変身しＩＳを展開しＩＳ学園に向かおうとしたときどこからともなくオートバジンが現れファイズブラスターを渡す。
巧はそれを受け取りＩＳ学園へ飛んでいった。

４２話（後書き）

もうすぐ最終回です。

ご感想ご質問お待ちしております。

43話

ＩＳのシールドエネルギーも尽きて体もボロボロなのに
一夏は王に向かい走っていった。
勝てるわけがない、
死ぬかもしれない、
それなのに立ち向かう。その姿は子供の頃の一夏とは全然違う。
カイザに変身しているからか、それともオルフェノクだから？
でも誰かのために走っていくその後ろ姿は昔よりも格好良かった。
だから私は一夏が好きなんだ。

「うぉぉぉぉぉぉぉおおッ！！」

全身は痛み、傷口からは血が出ているように感じるが
今は恐怖心は無い、心配してくれている人は家族だけじゃない。
全身から力が溢れる。
だけど勝てない。

ＩＳのシールドエネルギーは尽きて、動かないからフォトンブラット倍増もない。
でも王の進撃を止めれるだけマシといった所か、
カイザブレイガンで王の顔を斬りつける。
さすがに効いたのか、それとも痒かったのかわからないが光弾で吹き飛ばされる。
地面を転がり仰向けになってカイザは倒れる。
立ち上がり構えた瞬間、光の鞭のような物がカイザギアに向かい伸びてくる。

死

かなりの危険を感じ横に跳び何とか避けたが感じたのは自分の死だった。
だが息もつく暇もなくまた光の鞭が伸びてくる。
今度は避けられないそう感じ目を瞑る、だが衝撃は来なかった目を開けると
全身が紅のＩＳ紅椿が俺を守り、全身真っ赤のファイズが王を殴っていた。

「あれ…箒、それに巧も…」

「……行くぞ！一夏ァ！！」

一夏は巧に言われて急いで立ち上がり援護しにいこうとした瞬間
箒に呼び止められる。

「待て！一夏！」

「何だよ！箒……」

振り向いて箒に尋ねた瞬間、ＩＳのシールドエネルギーが回復していった。

「……これは…」

「行ってこい、一夏！待って居るぞ。」

どうやらシールドエネルギーの回復は紅椿の能力らしい、
箒には本当に色んなものを貰ったな…そう思い走る。

真っ赤なファイズ、ブラスターフォームは王と互角だった。
全身に流れるフォトンブラットをＩＳ５５５でさらに倍増しているのだから

何発か王を殴り、手首をスナップした後、王の胸を全力で殴る。

「……！」

さすがに王にも効いたらしく少し手で殴られた場所をおさえながら後ろによろめく。
そこでＩＳを展開したカイザも現れるとファイズはカイザに話しかける。

「おい、一夏あいつをアリーナまで連れてくぞ。」

「…どうやって？」

「……あいつの右手を掴んで飛べ。……行くぞ！」

そう言うと巧は一気に王との距離を詰め左腕を掴む、
一夏も右腕を掴み一気に飛ぶ。

二人に両腕を掴まれた王は抵抗する暇もなくＩＳの最大速度でアリーナまで連れて行かれた。

二人は王を抱えたまま地面に向かって急降下し王を地面に叩きつける。
地面に着地した巧はＩＳの通信でアリーナのシールドを張るよう叫ぶ。
するとすぐにアリーナがシールドで覆われ王とファイズとカイザを閉じこめる。
これで被害は広がりにくくなった。

ファイズはミッションメモリーをポインターに付け強化クリムゾンスマッシュをしようとする。
それをみてカイザもゴルドスマッシュの準備をする。

黄色い円錐と赤い円錐が王の動きを止めるとカイザとファイズは跳び上がり
蹴りを入れる。フォトンブラットは広がり広がりドームの客席を削る。

「ガァァァァァァァァァァァァァァァァァァァッ！！？」

王が悲鳴のような叫びをあげ肉体がフォトンブラットに削り取られ

る。

だが巧や一夏も無事でいられるはずがない。
ブラスターフォームは全身にフォトンブラットを流すのだ、
そのぶん強力だが肉体を蝕んでいく、
カイザもファイズより強力な黄色のフォトンブラット、
いくらオルフェノクといっても無害な訳がない。
そして二人ともフォトンブラット倍増という機能が付いている……

「ッ！」

ファイズの手元から灰がこぼれる、それもちょっとやそっとじゃない。
カイザからはファイズに比べて少量だがかなり危険だ。
だが二人とも蹴りをいれるのを止めはしない。

王はかなりダメージを負ってきたがまだ一押し足りない。
そう思っているときファイズとカイザの勢いが増す。

【イグニッションブースト】

その瞬間二人の蹴りが王の体を貫くとΦとXの文字が王に刻まれる。
そして青い炎と共に王は爆散する。

ファイズとカイザは王が完全に死んだということを確認してから変身を解除する。

ふぅ、と一息つき地面に仰向けになって一夏は倒れる。

巧はドームの壁にもたれかかって座る。

それから2分から3分位してからＩＳを展開した箒、セシリア、鈴、シャルロット、ラウラが
ドームに入ってくる。箒と鈴は一夏の方へ走っていき
セシリアとシャルロットは巧の方へ行く。

「乾さん、……以前は話も聞かず叩いてしまい申し訳ありませんでした。」

「巧、ごめんね……」

その謝罪を聞いて巧は少し笑いながら軽く
「そんなこと気にしてたのかよ。」
言うと一夏の方へ行ってやれと言う。

ラウラはゆっくりと巧に近づき手首を握り脈を確かめると
表情が凍りつき何も言えなくなった…

「……なぁ箒、鈴、悪ぃけど巧の所まで連れてってくれないか？全身が痛くて痛くて…」

箒と鈴は「仕方ないな」と呟き一夏の手を持ち、肩を組みながら歩く。

薄れゆく景色の中、地面は曇って見える
壁はモザイクのように見える。自分の手も青く光っているように見える。

全てが薄ぼんやりとしか見えない中で
巧ははっきりと一夏やみんなが笑顔でいるのが見えた。

……それでもう満足だった……

そして巧はゆっくりとまぶたを閉じた。

『世界中の洗濯物が真っ白になるようにみんなが幸せになりますように』

最終話　『Justiφ's』

９月１３日　日曜日

朝日がカーテン越しに部屋に入り、一夏を眠りから覚ますが
まだ少し眠たそうな顔をしながら洗面台に向かい顔を洗う。
水はかなり冷たく一瞬で睡魔は消えた。
寝間着を洗濯機に放り込み、制服に着替えながら歯を磨く。
休日でもＩＳ学園の中にいるときは制服を着なくちゃいけないとう
言う規則には
もうなれて何も思わない。着替え終わると部屋に鍵を閉めて朝食を
食べに食堂に行く。

鯖みそ定食を頼み適当な席に座る。
時間もまだ早く人は居ない、ほぼ貸し切り状態だ。

「いただきます。」

そう言って鯖を箸で一口分くらいにし口に運ぶ、
とても学食の物とは思えないくらいの味だった。

全部綺麗に食べると一言

「ごちそうさまでした。」

と言い完食した皿を持ち、返却口へ運ぶ。

とりあえず部屋に戻ろうと廊下を歩いていると何人かの女子に会い「一緒に食べよう」と誘われたが「悪い、もう食べた後」と言い断る。

部屋に戻ると手紙ともう使うことは無いであろうものが入った段ボールを手に取り、外へ行く、そこにはオートバジンがいた。ハンドルの近くにあるボタンを押し変形させるとオートバジンに段ボールと手紙を持たせスマートブレイン社に行くように伝える。

「何あいつの遺品にパシらせてんのよ。」

すると急に後ろから声をかけられる。この声は鈴だ。

「おう、おはよう鈴」

「……まぁ良いわ…おはよう一夏」

「あのさぁ鈴、今日暇だしさ、ＩＳの訓練でもしないか？みんな誘ってさ！」

「良いわよ！ただし負けたらなんか奢りなさいよ！」

「おう、良いぞ！」

そんなやりとりをしながらセシリア、シャル、ラウラ、箒、を誘う。
ついには負けたら5人全員に奢る約束になってしまった。

「あれ、あそこに居るのって織斑先生じゃない？」

「何であそこに？」

「あそこにしか無いコーヒーがあるんだよ。」

ラウラとシャルの疑問に一夏は素早く答えると織斑千冬に向かい大声で言った。

「千冬姉、おはよう！！」

みんな驚く、だって以前その呼び方をしたらすごい早さで一夏の頭を叩いたから
また叩かれる、と思っていたが織斑千冬は

「…ああ、おはよう一夏。」

としか言わなかった。

みんな驚くが、まぁそんなときもあるのだろう。と考えて去っていった。

スマートブレイン社の社長室に一夏からオートバジンと一通の手紙と段ボールが届いた。
木場はオートバジンに駐車場に戻るよう命令し手紙を読む。

『拝啓、木場勇治様

巧が死んだ後あなたはファイズギアを私に預けてくれましたことを感謝します。
ですが私自身も肉体に限界がきたようです。
だからこのベルトを持つことはできませんのでお返しします。

巧の話だと王を倒したらオルフェノクは時間と共に絶滅すると言っていましたが
それでもしばらくは人に害をなすオルフェノクは居るでしょう。
そのときは誰か巧の意志を継いでくれるような方にベルトをお渡しください。

それでは、織斑一夏より。』

その手紙を読んで木場は涙を堪えることができなかった。

「どうした？一夏」

「いや、何でもねぇよ。」

一夏はそう言い自分の手のひらを見つめるのをやめる。

「よし！ＩＳの訓練は止めにしよう！その代わりうまいデザートを作ってやる！」

一夏は笑顔でそう言うと寮の方向へ走り出した。

みんなも急いで一夏を追いかける。

ＩＳ学園の寮のベランダにはどこも真っ白な洗濯物が干してあった。

最終話　『Ｊｕｓｔｉφｓ』（後書き）

ここまでお付き合いいただきありがとうございました。
これで『ＩＳ　紅い閃光　仮面ライダー５５５』は完結です。
ちょっとした裏話的な後書きはそのうち書くつもりです。
ありがとうございました。

あとがき

どうもサムです。

この小説？　ＳＳ？を読んでいただきありがとうございました。

最初に書いたときは読んでくれる人が全然居ませんでしたが今では
かなり増えて
ランキングに載ったときは心が弾みました。

この『ＩＳ　紅い閃光　仮面ライダー５５５』は最初は
『ＩＳ　黄色い閃光　９１３』になる予定でしたが草加さんだと色
々大変なので
たっくんにしました。
だからＮＧとかでやたら草加さんが優遇されてたのはその名残です。

最初は一夏の存在はなく、箒の存在もありませんでしたが
箒を登場させ、一夏を登場させデルタにしようとしましたがボツに
そこで一夏をオルフェノクにしようと思ったらかなり楽しくなって
きました。

でもオルフェノクにしたらボコボコに言われるんじゃないか？

と思い結構悩みました。

結構行き当たりばったりでしたがエンドは絶対これだ！って思っていました。

そして謝らなければならないことがあります。

実は私555、7割くらいしか見ていないんです。

だから話の展開とかはわかるのですが、どんなセリフだったかとかは覚えていません。

だから書いている最中パラロスとか見たりしてました。

まぁでも無事に終われたってのが幸いです。

こんな所でしょうか！ありがとうございました！

ト、　ト、

｜，．＿L：l＿l：：：l

／：　：　：、l：：：l　、ト、

．／：　：　：　，．＿-へ：l。lト、、

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6808v/

IS　紅い閃光　仮面ライダー555

2011年9月25日21時37分発行